

般の人を指す。

〔義解〕今日に至るまで千里の馬を世間では珍らしいもの、如くいふが彼等は千里馬は房星が地上に下りて怪象をなすものなることを知らざるものである。諸君よ、八駿の圖は之ありとも之を愛好することなかれ。

〔第二十七〕 澗底松 念寒雋也

有松百尺大十圍 生在澗底寒且卑 澗深山險人路絶 老死不逢工度之  
天子明堂欠梁木 此求彼有兩不知

〔題意〕すぐれたる人物にして貧賤に棄てられ、格別の才能も無きに門閥を以て高位高官にあるものあり、その貧賤なるものに同情して此の詩を作る。

〔字句解〕圍 兩手にて抱き合せたる長さを圍といふ、凡そ五六尺はあるべし、十圍はその十倍。澗底 谷間のそこ。卑 地勢低下せるをいふ。老死 木が老いて枯死するなり。工度 大工が木の大きさの見つもりをすること、出典は「左傳」一年にみゆ。明堂 天子諸侯を

會し政令を敷く所。欠 かく、不足なり。梁木 「ハリ」に用うる木。此求彼有 此は天子の方をさし、彼は山澗をさす。兩 此と彼と兩方ながら。

〔義解〕此に長さ十丈、めぐり十かゝほどの松の木があつて、寒くてひくい谷底に生へてゐる。谷は深く山はけはしく人の通ふべき路もとだえたるによつて自然に老衰枯死して大工が自分の用途を見つもつてくれるといふやうな運命にであはない。他方に天子は明堂を建てられやうとしてうつばりに用うる材木が足らぬのにこまつて居られるが、こちらはさがす、あちらには有るのにお互に知らずにある。

誰論蒼蒼造物意 但與之材不與地 金張世祿黃憲賢 牛衣寒賤貂蟬貴

〔字句解〕誰 知るなり、誰論とは誰知のごとし。蒼蒼 天の色をいふ。造物 萬物を造りしものをいふ。蒼蒼造物とは天をさす。之 松の木をさす。材 材器、材木としてのねうち。地 便利な場所、山澗は木にとりて人に知らるゝには不便の地なり。金張 金日磾 張安世の一門をいふ。漢の宣帝の頃より榮えて七代も榮位にゐたりし貴族なり。世祿 代々君より俸祿をうく。黃憲賢 此の句或は原憲貧に作り、それをよしとする説あれども、余は黃憲賢に従ふ。黃憲字は叔度、汝南慎陽の人、世に貧賤、その父は牛醫なり、其の徳望すぐれ當世

の人物荀淑 陳蕃 周舉 郭泰 戴良 等皆之を重んじたりといふ、顯位に居らずして卒せり、「後漢書」<sup>卷八</sup>に傳あり。○牛衣寒賤 此句及下句の牛衣の衣の字或は醫に作れり、醫ならば黃憲の父が牛醫なりしにより憲をも牛醫と見倣しての言なり、又衣のまゝならば牛醫なるにより其の平生被りしものは牛衣牛にきせなりしならんとしての使ひ方と見ゆるなり、貧賤者が牛衣を被りしことに關しては漢の王章の故事あり、「漢書」の王章傳に見えたり。原憲とするならばそれこそ牛醫にも牛衣にも無關係なり、寒賤は貧賤をいふ。貂蟬貴 貂蟬は侍中・常侍の冠飾なり、侍中は惠文冠と稱する武弁の大冠をかぶる、黄金の耳耳の處へぶらが下がつてゐて蟬をくつゝけ、模様ある貂の尾を飾りに附す、侍中は貂尾を左に、常侍は右に附す、此の語は上句の金張を承く、金張は常侍を出だしたる家がらなり。

義解 天のこゝろはわからぬもので此の松の木にその材だけは與へながら便利な地勢を與へぬのである。之を人間社會で見ると金張の門閥はゐながら代々俸祿をもらつてゐて黃憲の如きは賢人である。賢人たる牛衣の者は貧賤であるが門閥の人たちは貂蟬のついた冠をかぶつて貴き位置にゐる。

貂蟬與牛衣 高下雖有殊 高者未必賢 下者未必愚 君不見沈沈海

底生珊瑚 歷歷天上種 白榆

字句解 牛衣 この衣の字或は醫に作る、説は上に出だせり。高下 身分位置の貴賤をいふ。○沈沈 ふかきさま。珊瑚 貴き寶なるをいふ。歷歷 一々はつきり。白榆 ニレの種類、樹皮白きを以て白榆といふ、古樂府「隴西行」に天上何所有 歷歷種白榆、とあり、これは天上の星を見たてゝいへるなり。今此の白氏の句はたゞその字句を借用せるなり、白榆はどこにでもある平凡の樹なり、因て之を用う。

義解 かの貂蟬を佩ぶる者と牛衣を被る者とは貴賤高下にはちがひがあるけれども、高位に在るものが賢いとは限らず、下位に在る者が愚とも限らない。實は或は却てその反對だ。諸君見たまはざるか、あの深い海海の底にも珊瑚樹があり、あの高い天の上にはつきり白榆の凡木がうゑられてあることを。

此の詩晉の左思が詠史詩の意を用ゐたり。

〔第二十八〕 牡丹芳 美天子憂農也

牡丹芳 牡丹芳 黃金榮綻紅玉房 千片赤英霞爛爛 百枝絳焰燈煌煌

〔題意〕天子が牡丹のうつくしきに對してよりも農事について意をふかく用ゐらるゝことをほめてつくれる詩なり。

〔字句解〕芳 花のかんばしきこと。黃金榮 榮は藥に作るべし。花榮なり、黃金はその色をいふ。紅玉房 房は花その物をさす、紅玉とは花のあかきを比す。千片 多くの花あるゆゑ千片といふ。赤英 あかい花ふさ。爛爛 かやく貌。百枝 株多きゆゑ百枝といふ。絳焰 絳はるび色なり、焰は焰に作るべし、火のほのふなり、花の赤きをたとへていふ。煌煌 たりかやくさま、

〔義解〕牡丹の花がかんばしく咲きいでた。すなはち紅玉と見まがふ花房の内部に黄金色の花葉がほころびでた。その千片の赤き花ぶさは霞の爛々たるがごとく、百枝のあかきほのふは燈の煌々たるが如し。

照他初開錦繡段 當風不結蘭麝囊 仙人琪樹白無色 王母桃花小不香

〔字句解〕照他 他は地に作るべし、字の誤なり。錦繡段 段は織物をいふ。蘭麝 共に香

ふものなり。琪樹 玉樹の類なり。王母 西王母。桃花 西王母の蟠桃は千年に一たび實を結ぶといへり。

〔義解〕この花の咲きさかるさまは大地を照らして錦繡の織物を今ひろげたたるが如く、風の吹く前に蘭麝の囊の紐を解き放ちにしたるに似たり。仙人の家には玉の樹ありと稱するもそんなものは白いだけで色が無い。西王母の桃の花も美しくはあらうが小さくておまけに香氣が無い。

宿露輕盈汎紫豔 朝陽照耀生紅光 紅紫二色間深淺 向背萬態隨低昂

〔字句解〕宿露 前晚より置きたる露。輕盈 みづ／＼しきさま。紫豔 露を帯びたる紫花の色をいふ。朝陽 あさひ。照耀 たりかやく。紅光 日光をうくる紅花についていふ。間 紫花の次には紅花といふやうにいりまじること。向背 我が方に向くとそむくこと。低昂 ひくき、たかき、

〔義解〕紫花に置きたる朝露は紫の豔をうかべ、紅花にかやく朝日は紅の光を生ず。紅と紫との二色が濃きと淺きと入りまじりにあり、こちら向きあちら向きのすがた、高くひく、

おもひくしのまゝなり。

映葉多情隱羞面、臥叢無力含醉妝、低嬌笑容疑掩口、凝思怨人如斷腸。

〔字句解〕多情 情韻多きなり。無力 よわくしきさま、氣力ぬけたるさま。低嬌 嬌面を低下する、すこし首を横に傾くるさま。凝思 ちつと思ひこむ。

〔義解〕此の四句は花を美人の姿態を以てたとへていふ。

葉かげに見ゆる花はその色葉のみどりにうつろひて、風情に富みたる佳人が羞かしさうな面をかくすが如く、くさむらに臥しかけたる花は氣力もなげに美人が酔ひのよそほひをたもてり。又た愛くるしき顔を傾けたるはにつこりとした佳人が口に袖をあて、笑ひを遮るかど怪まれ、ちつと思ひ入るさましたるは怨みを抱ける美人が腸を斷つが如きさまに似たり。

穠姿貴彩信奇絶、雜卉亂花無比方、石竹金錢何細碎、芙蓉芍藥苦尋常。

〔字句解〕穠姿 穠或は濃に作る、今濃に従ふ、濃は淡の反對、色こきをいふ、穠は華木稠多

なる貌なり。貴彩 貴重すべき色どり、紫又は紅なるゆゑいふ。信 まことに。雜卉 卉は草の總名。比方 たどへくらぶべきもの。石竹 金錢 ともに花草の名。細碎 小さくつまらなき。芙蓉 はすの花。芍藥 しやくやく。苦 はなはだ。尋常ありふれたもの。

〔義解〕この花の色こき姿、その貴き色彩はまことに非凡であつて他のさまの草や花などはとても之にくらぶべきものはない。石竹や金錢花などなせにあんなにこせついたものであるか、芙蓉や芍藥もすこぶ尋常すぎるのである。

遂使王公與卿相、遊花冠蓋日相望、庫車輕舉貴公子、香衫細馬豪家郎、衛公宅靜閉東院、西明寺裏開北廊、戲蝶雙舞看人久、殘鶯一聲春日長。

〔字句解〕王公 卿相 共に高貴の人々。遊花 花を見るために遊ぶ。冠蓋相望 蓋は車のほろ、車が引きつやくにより前後相望むべきをいふ。庫車 車の腰のひくきものをいふ。輕舉 舉の字「字典」に無し、舉の誤ならん、舉は輿と同じ、車の箱をいふ、輕の字或は軟に作る、並に義は通ず。貴公子 子の字或は主に作る、下に郎あればこの句は主の字よろしきに似た

り、今主に従ふ、公主とは天子の姫宮をいふ。香衫、香をたきこめた單衣のうはぎ。細馬、小形のうま。豪家郎、大家のわかもの、きんたち。衛公、太宗の朝の李靖、靖は衛國公に封せらる。閉東院、院とは奥庭をいふ、此の句の閉の字の意未だ詳かならず、家中の人々花みに出でゆきたるために戸を閉ちあることかご想像す。西明寺裏、西明は寺の名、牡丹花を以て名あり、裏は深に作るべし、字の誤なり。雙舞、雌蝶雄蝶ならびまふ。看人久、看人は人看の俗用なり、人の看ることいつまでもの意。殘鶯、春の晚れなれば殘といふ。

〔義解〕牡丹の美此の如くなるを以て遂に王公や卿相のやうな高貴の人々をして花見車が日々引ききりなしにつらくといふやうにさせてしまつた。或は腰ひくき車や軽らかなおこしに乗つた姫宮様や、或は小形の馬に香衫をはをつた大家の若殿ばらや、みな花見にとでかけるのである。李衛公の宅は家内總出とみえてひつそりして東の奥庭はとざゝれてあるし、之に反して花の盛り場たる西明寺ではその奥まりたる處に北の廊を開いて遊人を入れてゐる。園内では蝴蝶うちたはふれ看る人もあかすながめいり、老い鶯の一聲きこえて春の日なかゝに暮れんごもせず。

共愁日照芳難駐 仍張帷幕垂陰涼 花開花落二十日 一城之人皆若狂

〔字句解〕共愁、花を愛する一般の人々が相共に愁ふるなり。芳難駐、駐とは引止めおくこと。仍、従前もその様にし其次にも亦その通りに。帷幕、横に張るまくを帷といひ、上にはるまくを幕といふ。陰涼、くもり、すゞしさ。二十日、牡丹花のつらく期間。皆若狂、氣もくるはんばかり。

〔義解〕花を愛する人たちは此の牡丹花を日が照らすためにその芳しさを引き止めておくことがむつかしいことを心配して、しきりに側面や上面に幕を張りて日光を避け涼しさを取りいれたりする。花の開いたり落ちたりする二十日の間は滿城の人々みな氣もくるへるかご怪まる。

三代以還文勝質 人心重華不重實 重華直至牡丹芳 其來有漸非今日

〔字句解〕三代、夏殷周の古代をいふ。以還、以來に同じ。文勝質、華美なことが質樸よりもすぎる。華實、はでなこと、ぢみなこと。有漸、漸とは次第階級をいふ。非今日、今日遽に始まるに非ず。

〔義解〕三代よりこのかた華美なことが質樸よりもすぎる様になり、人の心ははでを貴びぢみを貴ばず、そのはですきは直ちに牡丹花の芳に狂ふといふまでになつてきた。かくなるには

次第々々にかくなつて來たので決して今日遽に始まつたわけではないのだ。

元和天子憂農桑 卹下動天天降祥 去歲嘉禾生九穗 田中寂莫無人至 今年瑞麥分兩岐 君心獨喜無人知

〔字句解〕元和天子 憲宗をいふ。卹下 卹は恤に同じ、慇懃なり、賑はすなり。動天 天子の行ひが天心を感動せしめる。降祥 祥はめでたきしるしなり。嘉禾 よきいね。九穗 一莖に九本のほ。瑞麥 めでたいむぎ。兩岐 岐は歧に通ず、二たまたになること。

〔義解〕我が天子におかせられては農業の事を心配せられ下民をいつくしみたまうた。それが天の心を感動せしめて天がめでたきしるしを地上にくだした。すなはち去年はよきいねが一莖に九本の穂を生じたが、田にはひつそりとしてだれもやつて來ぬ。またことしはめでたきむぎが一莖二またにわかれてできたが、これを喜ぶもの獨りわが天子の御心に於てあつて他にはだれも之を知るものがない。

無人知 可歎息 我願暫求造化力 減却牡丹妖豔色 少迴卿士愛花心 同似吾君憂稼穡

〔字句解〕造化力 天然主宰者の力。妖豔 あまりにあでやかなること。迴 反對の方へ向けかえる。卿士 しかるべき官位にある人々。稼穡 うゑつけと、とりいれと。

〔義解〕いねや麥がよくできてだれも知るものもないといふことはなげかはしきことである。余はしばし造物主の力をかりて牡丹のあまりにうつくしき色を減らし、身分ある人々の愛花心を他の方向へ向けかえて、もろともに吾が天子が農業について御心配あそばされるのにあやかる様にさせたいものである。

〔第二十九〕 紅線毯 憂蠶桑之費也

紅線毯 擇繭繰絲清水煮 練絲練線紅藍染 染爲紅線紅於花 織作披香殿上毯

〔題意〕此詩は蠶や桑が徒らに贅澤な織物などに費さるゝことを憂ひて作れるものなり。

〔字句解〕紅線 紅にそめた糸すち。毯 毛織りのしきものをいふ。繭 かひこのまゆ。繰くる、まゆから糸をたぐり出すこと。絲 きぬいと。練絲 練の字或は揀に作る、従ふべ

し、蓋し下の練線によりて誤れるならむ、揀はえらぶ。練線 練は煮たり水にひやかしながらしてねること。紅藍 アカネ。披香殿 程大昌の「雍錄」卷四に慶善宮に披香殿ありといへり、宮は武功縣の渭水北に在り、唐の高祖の舊第にして太宗の生れし處なり、是か、

〔義解〕紅き線を用ひて織り出せるしきものあり、之を製せんとするやまゆをえらび、絲をくり、きれいな水を以て煮、絲をえらび、線をねつて茜で染める。紅線に染めなしたところは花の色よりも紅である。之を用ひて織つて披香殿の殿上にしく毛織物をこしらへる。

披香殿廣十丈餘 紅線織成可殿鋪

〔字句解〕廣 とは面積をいふ。十丈餘 方十丈餘なり。紅線 線を或は毯に作る、毯のかたよろしきに似たり。鋪 敷くこと。

〔義解〕披香殿の廣さは方十丈餘である。この紅毯ができあがつたうへはその御殿にしくことが出来る。

綵絲茸茸香拂拂 線軟花虛不勝物 美人踏上歌舞來 羅襪繡鞵隨步沒

〔字句解〕綵絲 色どりをした絲。茸茸 ふさふさ。毛なみのみだれた貌。拂拂 泉水の下より上方へふつふとわき出す貌。軟 やはらか。花虛 花模様の有るか無きかに見ゆる。不勝物 抵抗力なきをいふ。蹴 ふむ。羅襪 羅はうすぎぬ、襪はくつたび。繡鞵 鞵は鞋に同じ、ひとへ底の革くつ、繡はそれにぬひこりをつける。沒 毯にうづまる。

〔義解〕彩色した絲はふさふさ。とみだれ、よき香りがたちのぼる。その糸すちはやはらかに模様は有るか無きかのさまにてすこしも他物に抵抗する力なくやんはりとしてゐる。美人がそれをふんで歌ひつ舞ひつすれば、繡した革くつもうすぎぬのくつたびもあゆむがまゝに毛にうづまつてしまふ。

太原毯澀毳縷硬 蜀都褥薄錦花冷 不如此毯溫且柔 年年十月來宣州

〔字句解〕太原 地名、今の山西省太原府。澀 しぶる、滑かならぬこと。毳縷 毳は細毛なる毛、縷はそのすぢ。硬 かたし、こはし。蜀都 今の四川省成都府治。褥 しとね。錦花 錦に織りだした花。宣州 安徽省寧國府宣城縣。

〔義解〕太原から出る毯は滑かたなく毛すぢはこはし。蜀でできるしとねはうすくて錦の花模様は有るか冷かに感ぜらるゝ。ともに此の毯の温く柔かなるには及ばない。この毯が毎年十月に宣州から獻せられてくる。

宣州太守加樣織 自謂爲臣能竭力 百夫同擔進宮中 線厚絲多卷不得

〔字句解〕太守 州の長官たる刺史をいふ、太守は元來は郡の長官をさし漢の時の稱なれども今借りて用う。加樣 卽ち原注の開樣加絲毯なり、新がらに特別の綵絲を増加して織り出せるなり。自謂 刺史自身がかんがへる。百夫 百人の男。同擔 いつしよにかつぐ。進もちこむ。

〔義解〕宣州の長官は新工夫をして樣式を加へてこの毯を織らしめた。彼は自分では人臣として能く力をつくしたと考へてゐる。この毯を百人がゝりで一緒に宮中へかつぎこむが、之を卷かうとしても線が厚く絲が多くて容易に卷くことができない。

宣州太守知不知 一丈毯用千兩絲 地不知寒人要暖 少奪人衣作地衣

〔字句解〕千兩 兩はめかたの名、少 勿れといふが如し。地衣 地面に敷くものゆる地にさせる着物といふ、

〔義解〕作者よりいふなり、

宣州の長官は知つてゐるかどうか、一丈の毯を作るには千兩の絲がいるのである。地面は寒

向く、民をいふ  
海、管、信、表、を  
二、七、九、三〇

くとも寒いことを知らぬが人は暖かなことを必要とするのである。どうか人の着るべき衣(の材料)を奪ひとつて、それで地面が着る衣などをこしらへぬやうに。

〔第三十〕 杜陵叟 傷農夫之困也

杜陵叟 杜陵居 歲種薄田一頃餘 三月無雨旱風起 麥苗不秀多黃死  
九月降霜秋早寒 禾穗未熟皆青乾

〔題意〕この詩は農夫の困難することを氣の毒におもつて作つたものである。

〔字句解〕杜陵 陝西省西安府城の東南十五里にあり、漢の宣帝を葬りし地なり。叟 老人。薄田 地味の悪しき田地。一頃 百畝を一頃とす、一畝は約百坪なり。青乾 青きまゝひからびる、

〔義解〕杜陵にある老人がある。この老人は年々地味のよくない田地一萬坪あまりに種を蒔く、ことしは三月には雨がなくてひでりの風が吹き、麥の苗は穂がでずに大抵枯れてしまひ、九月には霜がおりて秋が早く寒くなり、稻のほは實の熟せぬうちにみんな青いまゝひか



らびてしまつた。

長吏明知不申破 急斂暴徵求考課 典桑賣地納官租 明年衣食將

何如

〔字句解〕長吏 土地の上官をいふ。申破 申は上司へ申告すること、破とは事情を明白に解析するをいふ。急斂 斂は收なり、上の手へとりこむこと。○暴徵 徵は召し求むること、暴はにはかに、急にの意。考課 官吏の成績考査をいふ、唐の時その法凡二十七種あり。典 質に入れる。○納 政府の方へをさめる。○官租 お上の税金。

〔義解〕農民のかゝる情態を長官たるものは明かに知りながらそれを上司へ申告せず、無暗にせきたて、税金を徴收して、それで自己の成績考査をよくしやうと求めてゐる。農民の方では桑を質入れたり地面を賣り拂うたりして税金ををさめるが、さて明年の衣食はどうしやうとするのであるか。

剝我身上帛 奪我口中粟 虐人害物即豺狼 何必鈎爪鋸牙食人肉

〔字句解〕剝 はぎとる。帛 きぬ。粟 こめ。鈎爪 かぎのやうなつめ。鋸牙 のこぎりの

様なきば、鈎爪鋸牙は猛獸をいふ、

〔義解〕我々の農民に就からだに着るべき帛をはぎとり、我々が口中に食すべき粟を奪ひとつてしまつ。人をしいたげ物をそこなふものは是即ち豺や狼の類でないか、かぎの爪、のこぎり

不知何人奏皇帝 帝心惻隱知人弊 白麻紙上書德音 京畿盡放今年稅

〔字句解〕奏 申しあげる。惻隱 いたむ。弊 つかれたること。白麻紙 唐の制度にては「制」のときは白麻紙を用ゐる印を用ゐず、「詔」のときは黄麻紙と印とを用う。○德音 おなさ

けのことは。京畿 都及びその附近の地。放 放免する。〔義解〕だれが吾が君に申しあげたのか、君の御心では農民につきいたましくおぼしめされ、人民のつかれてゐることをおさとりになつた。それで白麻紙でおなさけの御趣旨を書かしめられ、京師及その附近の地はすつかり今年の税を免除さるゝことになつた。

昨日里胥方到門 手持尺牒勝郷邨 十家租稅九家畢 虛受吾君蠲免恩

【字句解】昨日、必しもその前日をいふに非ず。里胥、むら役人。門、民家の門をいふ。尺牒、長さ一尺の竹のふだ文字を書く用に供す。勝、掛けふだする、免税のことを書したる、牒をぶらさげるなり。畢、既に納め了るをいふ。虚受、虚ごは受け得ざるをいふ。蠲免、蠲は減すること、

【義解】きのふ村投人がやつと門口へやつて来た。彼は手に一尺ばかりのふだを持ちながらそれを村々に掲げて天子より減税免税の御達しがあつたことを知らせてある。しかし租税の方は十軒のうち九軒はもはやすんでゐるのだ。減免税のありがたき御恩は折角ながら形式上だけにお受けするに止まるのである。

〔第三十一〕 繅綾 念女工之勞也

繅綾繅綾何所似 不似羅綃與紈綺 應似天台山上明月前 四十五尺

瀑布泉

【題意】此詩は女工の苦勞をおもひて作れるなり。

【字句解】繅綾、綾は光あるあやぎぬなり、繅は終らす義なれば繅綾とは糸すぢをよりかけて

ねぢらかして織りたる綾ならんか。○羅綃、羅はうすぎぬ、綃、練らぬ糸にてつくりし白のうすぎぬ、○紈綺、紈は白きかとりぎぬ、綺はあやあるきぬ、綾ごの別は光あると無きとなり。○天台、山の名、浙江省の臺州府にあり。

【義解】こゝに繅綾といふあやぎぬがある。それは何に似てゐるか。それは羅綃紈綺などには似ず、天台の山の上に月の照らすとき掛りたる四十五尺の瀑の水に似てゐることであらう。

中有文章又奇絶 地鋪白煙花簇雪 織者何人衣者誰 越溪寒女漢宮姬

【字句解】中、綾の表面をいふ。鋪煙、簇雪、並に形容の辭なり、一般に白きゆる煙をしくといふ、仔細にみれば花模様多くあり、ゆるに又雪を以て花をたとへて雪をむらがらすといふ。○衣、着ること。越溪、浙江省の山溪をいふ、これは後の事なるも穆宗の朝に李德裕浙西觀察使たりしとき詔して盤條繅綾千匹を索めしめしに徳裕書を上りて之を辭せしことあり、以て越即浙江の地方の繅綾を出だせしことを知るべし。漢宮、唐の長安の宮をいふ。姬、大奥の女人等をいふ、

【義解】繅綾の表には非常に奇妙なる文章がある。その美しさは地上に白煙をしきたる如く、又花の雪を簇らすが如し。これをだれが織りだれが着るのか。織り手は浙江の山間、貧家の

むすめであり、着る人は長安の宮中の女人等である。

去年中使宣口勅 天上取樣人間織 織爲雲外秋鴈行 染作江南春水色

【字句解】中使 宮中のお使ひ。宣 申しわたす。口勅 天子の口づからの仰せごと。文書に記したるものに非るなり。天上 宮中をいふ。取樣 様は様式、手本とすべき型をいふ。人間 民間をいふ。雲外 雲のあるかなた。秋鴈行 行は行列。江南 揚子江の南。春水色 みどり色をいふ。水の字を或は草に作る、並に通ず。

【義解】去年は御所からのお使ひが陛下の御ぼしめしを傳へて宮中より見本をどりそれによつて民間で織らせることにした。その色合ひは江南の春の水の色に染め、模様は空とふ秋の雁のつらを織りだすことにした。

廣裁衫袖長製裙 金斗熨波刀剪紋 異彩奇文相隱映 轉側看花花不定

【字句解】裁 たつ。衫袖 うは着のそで。裙 はかま。金斗 銅でつくつた火のし。熨波 熨は火のしを用ゐてのし平かにすること。波は綾の地のしはだちたる處。刀剪紋 刀はたちものにつかふ刀、剪はきる。紋は模様をいふ。紋は或は雲に作る、雲といはゞ模様の一部に

なる。○異彩奇文 めづらしき色どりあや。隱映 見えがくれにうつりあふ。轉側 ち側面から。看花 花は浮き模様をいふなるべし。不定 うつりかはる。

【義解】この綾でたつぷりと衫の袖を裁ち、すそながに裙をこしらへる。それには或る模様の處が刀でたゞれる、出来あがつた小じはなどは火のしでよくするのである。めづらしい色あやが互にうつろうて、之を側面からながめても浮き模様はちら／＼して見定めにくい。

昭陽舞人恩正深 春衣一對直千金 汗沾粉汗不再著 曳土踏泥無惜心

【字句解】昭陽舞人 昭陽は含ほつの名、漢の成帝の皇后趙飛燕の妹趙昭儀の居りし處なり。こゝはたゞ大奥のお局の義に借用せるまでなり。○舞人 舞ひをする宮女。恩 天子の恩寵。一對 ふたかさね。直 値と同じ。汗沾 あせがうるはす。粉汗 おしろいがけがす。不再著 二度とさぬ。曳土踏泥 泥土の上をひきする。○惜心 愛惜することゝろ。

【義解】お局の舞ひをする女が今てうど深く天子の御恩を被つてゐるので、そのものに一對あたひ千金もする春衣この綾で作を賜はる。その舞衣も汗がついたり白粉がよごしたりすれば二度とはさず、泥土の上をひきすつて惜しどもおもはぬ。

線綾織成費功績 莫比尋常繪與帛 絲細縵多女手疼 扎扎千聲不盈尺

昭陽殿裏歌、舞人若見織時、應也惜。

〔字句解〕功績、いさをし、工人の手わざをいふ。繒、帛、並にきぬのこと、帛は厚し。疼、いたむ。札、札に作るべし、ばた〜といふ音。也、俗語、雅言の「亦」と同じ。

〔義解〕この綾が織りなされるにはよほどの手業を費したのである、之をたゞのきぬものと一緒に見てはならぬのである。絲は細く、たび〜手ぐりにかけ、女工の手がいたくなる、千たびばた〜いはせて機を織つても一尺にはみたぬほどである。昭陽殿の歌舞の人たちも若しこの織る時を見たならば或は彼等も之を惜むことであらう、たゞ見ぬから惜まぬのである。

〔第三十二〕 賣炭翁 苦宮市也

賣炭翁 伐薪燒炭南山中

〔題意〕これは宮市のために人民が苦むことをうたへる詩である。宮市とは宦官去勢されて大奥に仕へる者なりどもが市街から物品を取つていつて宮中で商賣をすることをいふ。その物品を取る際に正當

な代金を拂はず、或は値なきものを以て支拂ひに充てる等の事があつた。之がため人民は迷惑した。

〔字句解〕賣炭翁、炭をうる老人。南山、終南山、長安の南に在り。

〔義解〕炭うりのおちいさんがあつて終南山の中で薪を斬つたり炭を焼いたりする。

滿面塵灰煙火色 兩鬢蒼蒼十指黑 賣炭得錢何所營 身上衣裳口中食

〔字句解〕滿面、かほちう。煙火色、すゝばけたいろ。兩鬢、左右のびん。蒼蒼、ごましほ。所營、もうけだす。

〔義解〕おちいさんは顔ちう塵や灰をあびすゝばけた色をして、左右のびんの毛はごましほで十本の手の指はまつくろだ。ちいさんは炭をうり錢を得てそれで何をするのかといふに、それで身につける衣裳をかひ、口でたべる食物をもとめるのだ。

可憐身上衣正單 心憂炭賤願天寒

〔字句解〕單、單薄なるをいふ、うすぎしてゐる。心、翁の心中。炭賤、賤は値のやすいこと、

〔義解〕きのどくなことにちいさんはうすぎをしてゐる、しかし心では炭のねだんのやすいことを心配して氣候が寒くなつてくれればよいとねがつてゐる。

夜來城外一尺雪 曉駕炭車輾氷轍 牛困人飢日已高 市南門外泥中歇

〔字句解〕駕 柁棒に牛をつなぐこと。輾 車輪をころがすこと。氷轍 轍は輪の迹、わだちなり、雪ふりのあとゆゑ氷むすぶなり。市 長安の市街。歇 休息する。

〔義解〕ゆふべからかけて城外には一尺からの雪がつもつた。ちいさん炭をたかくうらうとおもつてあけがた早々牛を炭車につないで氷結してゐるわだちの上をころ／＼やつてゆく。やがて太陽も高くさしのぼつて牛もつかれ人も腹がへつて來たので、南門の外で泥みちのなかでちよつとひといきやすんでゐる。

兩騎翩翩來是誰 黃衣使者白衫兒

〔字句解〕兩騎 二人の騎馬。翩翩 馬の行く貌。使者 即ち宦官なり、時に宦官を「宮市使」となせり。白衫兒 白きうはぎを着たわかもの、宮市には白望數十百人を置くといへり、文字に由て之を推すに白望とは白衣を着た探望者なるべし、白衫兒は蓋し「白望」ならん、

〔義解〕向ふの方から誰だか知れぬが二人の騎馬が飛ぶが如くやつてくる。見れば黃衣を着た使者と白衫をきたわかものである。

手把文書口稱勅 迴車叱牛牽向北 一車炭重千餘斤 宮使驅將惜不得

半匹紅紗一丈綾 繫向牛頭充炭直

〔字句解〕把 とる。文書 かきつけ。迴車 翁が置いた方向と反對の方へむけかえる、翁或は使者を見て車を南に向けしならん。牽 ひく。向北 北は城内の方なり。宮使 上の使者。驅將 かりもてゆく。惜不得 不得惜と同じ、惜しとおもへどもさうはできぬ。半匹 四丈を匹とす、半匹は二丈にあたる。紅紗 あかきしや。炭直 直は値に同じ、

〔義解〕使者は手にかきつけをもち口ではお上の仰せごとだぞといひながらちいさんの車の柁棒を向けかえ牛を叱りつけて北に向けてひつばらせる。この牛車一臺には重さ千餘斤の炭がつんである、やりたくはないのだが、宮中の使者と稱する奴が驅りたて、ゆくのでいかんともしがたい。そして紅紗が半匹に綾が一丈、それを牛の頭にかけてそれが炭の代金にされてゐるのである。

〔第三十三〕 母別子 刺新聞舊也

母別子 子別母 白日無光哭聲苦

〔題意〕或る武人が功を建て、君より金錢を多く賜はりしにより美女を迎へ入れた。美女が新に來たゝめに子まである舊き妻女が逐ひ出されることになつた。すなはち新しく來た者がふるくから居るものを離間することになつたのである。かゝる世間のさまをそしるために此詩は作られたのである。

〔字句解〕母、子、武人のもと愛してゐた女ごそのことも。無光、光があるけれども力なきさまをいふ。哭聲、大聲をあげてなく、

〔義解〕こゝに母子別れの場面がみえる。太陽も力なげに光もなきがごとく、いかにも苦しげになきこゑがしてゐる。

關西驃騎大將軍 去年破虜新策勳 勅賜金錢二百萬 洛陽迎得如花人

〔字句解〕關西、關は函谷關をいふ、關東出相、關西出將、の語あり、。驃騎大將軍、漢の

頃は職名なり、唐にては武官の位の名となる、從一品に相當す、。破虜、虜は吐蕃等の西方未開民族をさす。策勳、策は冊に同じ、竹の札を編みしものをいふ、策すとはその策に書きしるすこと、唐の時は已に紙を用うるも古めかしていへるなり、勳は戰場にて建てし勳功をいふ。古代には凱旋すれば宗朝に至り酒を飲み勳を策にしるす禮あり。洛陽、今の河南省河南府洛陽縣、唐の時の東都なり、。如花人、美人をいふ。

〔義解〕關西の驃騎大將軍が去年るびすをうち破て新に勳功を錄せられて、天子から金錢二百萬を賜はつた、その錢を用て洛陽から花のやうな美人を迎へ入れた。

新人迎來舊人棄 掌上蓮花眼中刺

〔字句解〕新人、洛陽より迎へた女をさす。舊人、以前から家に居りし女をさす。掌上蓮花、掌の上なるはちすの花、之を愛撫することをたどへていふ。眼中刺、刺はトゲなり、眼中の刺とは之を邪魔物としてきらふをいふ。

本文の二句いろ／＼に解釋することを得。(一)舊人の眼より見、花も刺も新人とみる、とす、(二)將軍の眼より見、花も刺も舊人とみる、とす、(三)第三者から見、花を新人、刺を舊人とみる、とす、等によりて差異を生ずべし。

義解 前記の(三)によれば掌上蓮花は新人をうけ、眼中刺は舊人をうくるものと見る。其の解下の如し、新人迎へいれられたため舊人はふりすてられる。新人は掌上の蓮花の如く愛撫せられ舊人は眼中の刺の如く抜きすてられる。

(一)によれば其解下の如し、新人が迎へられたため舊人は棄てられる、舊人たる自分の身にこつては將軍が今掌上の蓮花と愛撫するその女は眼中の刺とも感せらるゝのである。掌上蓮花は新人をさす。此説にては掌上蓮花眼中刺、とよむべし。

(二)によれば下の如し、新人が来たために舊人は棄てられた。嘗て掌上の蓮花として愛撫せられたもの即ち舊人は今は眼中の刺として邪魔あつかひにされるのである。これも掌上蓮花眼中刺、とよむも、花も刺も同一舊人につき下したるものと見んとするなり。(三)と(一)との二説各々通するも余は此の(二)を採らんとす。其の理由は白氏の續古詩の第七首に、容光未銷歌、歡愛忽蹉跎、何意掌上玉、化為眼中砂、とあり、これ同一人につき昔日掌上の玉と愛せられしものが今日は變じて眼中の砂の如く邪魔ものにせらるゝことをいふ。同一人の境遇の變化をいへり。此の例を推して本詩の掌上蓮花眼中刺も舊人のみについての境遇の變化をいへしものかと考ふるなり。

迎新棄舊未足悲 悲在君家留兩兒 一始扶行一初坐 坐啼行哭牽人衣

〔字句解〕扶行 他人から手をそへてもらつてあるく。坐 ひとりですはる。坐啼行哭 坐行は坐者行者の義。人衣 人は母自らをいふ。

〔義解〕舊夫人の胸中を寫す、

將軍が新しい人を迎へ舊い自分を棄てたからとて悲むには足らぬが、悲みにたへぬのは將軍をさすの家に二人の子供をのこしておくといふ點にあるのである。二人のうち一人はやつと人手に扶けられてあるくのであるし、いま一人はやつと一人で坐ることができるのである。この坐はることのできる方は啼きながら、やつとあるく方のは大聲でなきながら自分の衣をひつばつてすがるのである。

以汝夫婦新嬾婉 使我母子生別離 不如林中鳥與鵲 母不失雛雄  
伴雌 應似園中桃李樹 花落隨風子住枝

〔字句解〕汝 將軍等をさす。嬾婉 安順なり、親密なるさま。住 といまる、住を或は在に作る。

〔義解〕夫人胸中のついき、

汝等夫婦が新に仲よくむつまじいために我々母子をして生きわかれをさせる様にしてしまつた。もりのなかの烏や鵲が母は雛をなくせず、雄は雌を伴うてゐるよりも劣つてゐる。園の桃や李が風のまに／＼花をふきちらされその子だけ枝にのこつてゐるのと似てゐるであらう。

新人新人聽我語、洛陽無限紅樓女、但願將軍重立功、更有新人勝於汝。

〔字句解〕無限、無數といふが如し。紅樓女、倡家の女。汝、洛陽より今度迎へられて來た女をさす。

〔義解〕上のついき、

新人よ新人よ、我がいふことをきけよ。洛陽にはなほ無數に澤山の紅樓倡家の女がある。余は將軍がも一度戦功をたて、汝以上の新人あつてそれを迎へるやうになることを願ふものである。

〔第三十四〕陰山道 疾貪虜也

陰山道 陰山道 紇邏敦肥水泉好、每至戎人送馬時、道傍千里無纖艸、

〔題意〕此の詩はるびすの貪慾なるをにくみて作れるものなり。

〔字句解〕陰山、山西省の西北歸化城の西北境より包頭を経て烏喇忒の西境にわたり五百支那里餘に連れる山脈なり。○紇邏敦肥、語義未だ詳ならず。戎人、回鶻をさす。○送馬、馬を支那の方へ送り來るなり、これは下文に見ゆる如く唐の朝廷よりやる縑と交換するためなり。○纖艸、かほそきくさ。

〔義解〕陰山より唐へ通ずる道路。その道すぢは紇邏敦肥で水のわき出る處もよろしい。それにも拘らず回鶻のるびすが馬を送つてくる時期になればいつも道の左右にはほそい草一つ無い様になる、馬之を食すればなり。

艸盡泉枯馬病羸、飛龍但印骨與皮

〔字句解〕羸、つかれる。飛龍、飛の字、龍の字の印をいふ。○印、唐の時官馬には燒き印を押す。○骨與皮、馬瘦せて骨と皮とを除すなり。

〔義解〕餘り多く馬がくるために草は盡き泉も枯れてなくなり、つひに馬は病みつかれる。そ



れで馬が唐のものとなるごときには折角のよき馬もたゞその骨と皮とに焼き印を押すことにな  
る。

五十匹、縑易一匹、縑去馬來無了日、養無所用去非宜、每歲死傷十六七

〔字句解〕縑、きぬ。易、一匹。易の字或は馬に作る、馬の字よろしきに似たり、今之に従ふ、  
易は蓋し訛字なり。無了日、はてしがない。去非宜、去とは退去せしむるをいふ、非宜はつ  
がふがよくないといふこと、十六七、十のうち六又は七、

〔義解〕馬一匹、それは五十匹の縑と交換されるのである。回鶻からは馬が来る唐の方からは  
縑がいく、一來一去その終る期日ごては無。來た馬を養うておいても用うる所もなく、さ  
ればごて之を退去さすといふことも政治上都合がわるい、ので仕方なく馬を受取つておくの  
であるが毎年十中の六七は死傷してしまふ。

縑、絲不足、女工苦、疎織短、截充匹數、藕絲、網三丈餘、回鶻訴稱無用處

〔字句解〕疎織、あらくおる。短截、みじかくきる。充匹數、匹の數だけそろへる。藕絲、蓮  
根の絲。蛛網、くもの網絲。回鶻、るびすの名。訴稱、唐に向ひ訴へいふ。無用處、用る處

がない役たぬ、

〔義解〕回鶻へやる縑があまり澤山であるから縑を作る絲が足りなくなり女の手業も甚だやり  
にくくなる、それであらつぼく織つたりたけを短くきりつめたりして匹數だけをそろへる。  
中には蓮糸や蛛の糸をませて織りたけ三丈餘りしかないのがある、之に對して回鶻はこんな  
ものをよこされても役立たす處がないと不足を訴へる。

咸安公主號可敦、遠爲可汗頻奏論

〔字句解〕咸安公主、德宗の女にして燕國襄穆公主と稱す、始め咸安に封せらる、德宗の貞元  
三年回紇婚を乞ふ、李泌の勸めにより之を許す、四年九月回紇より來て之を迎へ、五年七月  
回紇の衙帳に至りしといふ。四年十月回紇は唐の許を得て紇の字を鶻と改む、可敦、夷語  
なり、妃の義なり。可汗、夷語なり、夷の王をいふ、咸安公主の嫁したるは合骨咄祿可汗と  
いふ者なり。奏論、德宗に向て奏し論ずる、

〔義解〕德宗の姫宮咸安公主は回鶻へ嫁せられ、回鶻の可汗のために頻に縑の質がわるくなつ  
たことについて論奏せられる。

元和二年下新勅、内出金帛酬馬直、仍詔江淮馬價、從此不令疎短織。

〔字句解〕元和、憲宗の年號。内出、内とは天子の御内藏をいふ。江淮、揚子江・淮水の流域。馬價、馬の價に酬ゆるための織。

〔義解〕憲宗の元和二年になつてから新しき勅を下され、御内藏から金銀や帛をだして之を馬の代價としておつかはしになつた。又ついでに詔があつて江淮地方よりさしだす馬價としての織は、今後はあらくも短くも織つてはならぬといふことになつた。

合羅將軍呼萬歲、捧授金銀與縑綵、誰知黠虜啓貪心、明年馬多來一倍。

〔字句解〕合羅將軍、回鶻の將軍の名ならん。合羅の名は未だ詳ならず、羅を或は闕に作れり、合闕將軍ならば威安公主の降嫁以來唐と來往せる使者なり。捧授、さげ授くる、授ならば合闕が受け取しものを復他の使者などに授くることなる、授を或は受に作れり、受ならば合闕自身が唐の役人から受け取ることなり、受に従ふ。金銀、綵、即ち天子の御内藏より出された品物なり。黠虜、するきゑびす、回鶻をさす。啓貪心、貪慾な心をおこす。多來、多來を或は來多に作れり、よろしきに似たり、今之に従ふ。

〔義解〕回鶻の使たる合羅、或は將軍は萬歲をとなへながら金銀や縑綵をお受けする。意外にもこれからするゑびすは貪慾心を起こすことになり翌年は馬の來ることが一倍多くなつてきた。

縑漸好、馬漸多、陰山虜、奈爾何。

〔字句解〕陰山虜、回鶻をさす。爾、汝、回鶻をさす。

〔義解〕こちらからやる縑がだん／＼よくなればそれにつれてあちらから馬が多く來る。陰山地方に住んでゐるゑびすめら、まさまたちをどうしたものか、始末にをへぬものどもだ。

〔第三十五〕 時世妝 警將變也

時世妝、時世妝、出自城中傳四方。

〔題意〕この題序には誤あるならん。或は警戎也に作る。今之に従へば、此詩は世に奇妙なる粧ひ流行するはやがて戎狄の亂あらんとする前兆なりとの趣意にて、之を警むるを目的として作られたるものなり。

〔字句解〕時世粧、時のはやりのよそほひ。城中、四方、漢の時に「城中謠」といふものあり。

り、曰く城中好高髻、四方高一尺、城中好廣眉、四方且半額、城中好大袖、四方全匹帛。流行が都會より四方に傳播することをいふ。白氏の句其意を用ゐたり。

〔義解〕時のはやりの婦人の身のよそほひ、それは都の城の中から出て四方へと傳はるのである。

時世流行無遠近、顯不施朱面無粉、烏膏注唇唇似泥、雙眉畫作八字低、妍蚩黑白失本態、妝成盡似含悲啼、圓鬢無髻椎髻樣、斜紅不暈赭面狀。

〔字句解〕無遠近 地の遠近にかゝはらず。顯 あごなり、あごより頬にかけていふなるべし。朱 べに。粉 おしろい。烏膏 くろきあぶら。注 さす。似泥 きたなきをいふ。雙眉 左右のまゆ。八字低 八字のたれまゆ。妍蚩 きれいとみにくき。本態 粧ひごいふ實質。含悲啼 なきすがた。圓鬢 圓形のかつら。髻 髮の横面のふくらみ。椎髻 ちよんまげ、茶釜まげの類。斜紅 紅をはすかひにぬる。暈 ぼかす。赭面 あかづら、是は舞若くは劇の面につきいふならん。

〔義解〕世の流行はひどいもので近きも遠きもなく一般にはやる。それはあごに朱を施すでも

なく面におしろいをつけるでもない。まつ黒なあぶらを唇にさしてそのきたなきこと泥の如く、眉は八字にたれまゆをえがく。うつくしいも、みにくいも、黒いも白いも、そんな差別あるわけのものでなく、てんで化粧の本質を失つてゐるので、化粧のできあがつた所を見るどどの女も半泣きの體である。髮はによつきり圓いかつらが浮びあがつて茶釜まげかなんぞしてゐる野蠻人のやうであり、はすかひに頬べにをぬつてぼかしもせぬのは赤しやづらの様に見える。

昔聞被髮伊川中、辛有見之知有戎、元和妝梳君記取、髻椎面赭非華風。

〔字句解〕被髮伊川 辛有 有戎 事は「左傳」僖公廿二年に見ゆ、辛有は周の人なり、あるとき伊川にゆきしに髮を被りて野に祭る者あるを見る、因て曰く、今より百年ならずして此地は戎とならんか、中國の禮先づ亡びたりと。○妝梳 化粧。○記取 心に記せよ。○華風 中國の文明なる風。

〔義解〕昔し周の辛有は伊川でもつて髮を被つてゐた者のありしを見て將來其地に戎あるべきを知つたと聞く。今日元和の化粧の様如何、諸君之を心に記せよ、椎髻・赭面・の如きは我が文明の風ではないのであることを。此の風已まざれば辛有昔日の豫言の如く戎が興るに至る

かも知れぬのである。

〔第三十六〕 李夫人 鑿鑿惑也

漢武帝 初喪李夫人 夫人病時不肯別 死後留得生前恩

〔題意〕漢の武帝が李夫人を寵愛して深く其の色に溺れ、夫人の死後もなほ其の魂を呼びかへさんとせしことの惑へるをのべ、之につきて鑿みる所あらしめんとして此の詩を作れり。

〔字句解〕武帝 劉徹なり、前漢第四代の天子。李夫人 李延年・李廣利の妹にして武帝の寵姫なり、詳は「漢書」卷九外戚傳に見ゆ。不肯別 武帝が李夫人と別るゝ念なきをいふ。留得 そのまゝのこしおく。

〔義解〕漢の武帝が李夫人を最近に喪はれた。夫人の病氣のとき帝はどうしても夫人と別れたくなかつたので、夫人の死後にも生前そのまゝの恩寵をのこしおかれた。

君恩不盡念未已 甘泉殿裏令寫眞 丹青寫出竟何益 不言不笑愁殺人

〔字句解〕君恩 武帝の恩寵をいふ。此句武帝の側より叙するものなれば君恩といふは妥當な

らず、恩愛・恩情などといふべき所なり。念 武帝が李夫人を念ふなり。甘泉殿 陝西省邠州府淳化縣の西北甘泉山に在り。寫眞 肖像を寫がしめる。丹青 あか、あを、の繪具。竟何益 結局利益なし。言笑 李夫人が言笑するなり。愁殺 殺は甚だしきをいふ。人 圖を看る人。主として武帝をさす。

〔義解〕天子の恩愛の情は夫人死後もなくならず、どうしても夫人を念ひきることができず、遂に甘泉殿に於て畫家に命じて夫人の像を繪がせせた。しかし繪具を用て畫かせてもつまるところ何の利益があるや、利益ごては無い、畫像の李夫人は話しもせず笑ひもせず、たゞ之を看る人をして非常に愁ひを催さしむるのみである。

又令方士合靈藥 玉釜煎鍊金爐焚 九華帳深夜悄悄 反魂香降夫人魂

〔字句解〕方士 術を使ふ人、齊人少翁といふ者なり、此の人神靈を呼びよせる法を知り、夜燈を張り、帷帳を設け、酒肉を陳ね、武帝をして他の帳に居て美婦人を望見せしむるに其の婦人宛も李夫人と似たり、武帝いよゝ悲みて歌を作る。玉釜 玉のかま。金爐 金のいろり。九華帳 いろゝの華模様のあるかや。悄悄 ひつそり。反魂香 反は返なり、死者の靈魂を呼び返へす香。

〔義解〕武帝は又方士たる齊人少翁なるものに不思議な薬を調合させ、その薬を玉の釜で煎じたり錬つたりし、金の爐で火を焚いた。立派な模様のかやの深く垂れこめたるどころ、夜もひっそりした頃、方士の反魂香の力は遂に李夫人の魂を下界に招き降した。

夫人之魂在何許 香煙引到焚香處 既來何苦不須臾 縹緲悠揚還滅去

〔字句解〕何許、いづれのもと、どころ。○引到、引とはみちびくこと。○既來、以下は看る人の胸中をいふ、來とは夫人の魂が來ること。○何苦、苦とはさしつかえといふがごとし。○須臾、暫時、しばし止まること。○縹緲、氣のたなびくさま。○悠揚、ふはり〜。○滅去、消えうせさる。

〔義解〕さて夫人の魂は果していづこにあるか。香の煙にみちびかれて方士が香を焚いてゐる場所までいつてみる。夫人の魂は折角こゝへ來たのに何のさしつかえあつてか暫時こゝに留止せぬのであるか、やがてふはり〜と消えうせゆく。

去何速兮來何遲 是邪非邪兩不知 翠蛾髮髻平生貌 不似昭陽寢疾時

〔字句解〕來何遲、是邪非邪、武帝が李夫人の姿を望見した時に歌を作つた。其の辭に曰く、

是邪非邪 立而望之 偏何媿媿其來遲 白氏の語此に本づく。是邪非邪とは李夫人の姿か、それか、あらぬか、と疑ふなり。○兩、是と非と二つながら。○翠蛾、蛾は蛾眉、美人のうつくしきまゆ、翠は色なり。○昭陽寢疾、昭陽は成帝の趙皇后の妹趙昭儀の居たる舎の名なり、こゝはたゞ宮中のお局のことに用う。

〔義解〕李夫人は立ち去ることはどうしてあのやうにはやいのであるか、そうして來るのはどうしてこのやうにおそいのであるか。今それらしい姿は見えるが果してそれなのか、そでないのか、どちらだかはつきりわからぬ。翠の眉つきはふだんの貌をつくりで、あの大奥の局で病みふしてゐたときは似てもつかぬうつくしさだ。

魂之不來君心苦 魂之來兮君亦悲 背燈隔帳不得語 安用暫來還見違

〔字句解〕君心、君は武帝をさす。○背燈、燈を自己の背後にひかえてゐる。○隔帳、かやごし。○語、李夫人と物語りする。○安用、反語なり、無用なりとの意。○暫來、李夫人が少しの時間だけ下界へ降り來ること。○還見違、此の三字或は遙見爲に作れり、孰にても通ず。還は俗語「また」なり、見違の違は我に違ひてあちらへ去るをいふ、見は受動「らる」に當る、夫人よりいへば去るなり、武帝よりいへば去らるゝなり。○遙見爲に從へば、遙見爲と訓む、遙見

とは帳を隔て、遠く相見ゆるをいふ、爲とは夫人が遙見といふことをなすをいふ。

〔義解〕夫人の魂が天上に在りてこちらへ來なかつた時には天子の心は苦まれた。が魂が下界へ降つて來た時には天子の心はまた悲まれた。燈を背にし帳をへだて、愛する其人 李夫人としてみづく物語りすることができぬ。こんなことならちよつと來てまたすぐ去るといふ必要はないではないか。(遙見爲に従へば、「ちよつと來て遠くから面會するといふ様なことをする必要がどこにあるか」)

「既來」より此處までは武帝の胸中についてのぶ、

傷心不獨漢武帝 自古及今皆若斯 君不見穆王三日哭 重璧臺前傷盛姬 又不見太陵一掬淚 馬嵬坡下念楊妃 縱令妍姿豔質化爲土 此恨長在無銷期

〔字句解〕穆王 重璧臺 盛姬 以上は已に「八駿圖」の詩に於て説きたり。太陵 太は泰に作るべし、秦陵は唐の玄宗の陵なり、陝西省同州府蒲城縣金粟山にあり、こゝは陵名を以て玄宗を指せり。一掬 手に一とすくひ。馬嵬坡 陝西西安府興平縣西二十五里にあり、玄宗安

祿山の亂を避け蜀に奔らんとし、此地に至り、陳玄禮等に迫られ楊貴妃を戮せし處なり。妍姿 うつくしきすがた。豔質 うつくしき體質、質の字を或は骨に作る。此恨 死者と離れ居る恨。銷期 きゆるとき、

〔義解〕以下は一般につきていふ、

愛人を失ひて心を傷ましむるものは漢の武帝ばかりではない。古から今日まで皆そのとおりである。諸君見ざるか、彼の周の穆王は三日の間大に哭して重璧臺の前で盛姬を傷んだことを。諸君又見ざるか、彼の玄宗皇帝は一掬の涙をそゝいで馬嵬坡の下で楊貴妃を念はれたことを。たごひその美人等のうつくしき姿や、あてやかな肉體は土に變化してしまはうとも、その人に對する離居の恨みといふものは永久に存在して銷滅する時期とては無いものである。

生亦惑 死亦惑 尤物惑人忘不得 人非木石皆有情 不如不遇傾城色

〔字句解〕生 死 美人の生死なり。惑 美人を看る人が惑ふなり。尤物 特別すぐれたる美人をいふ、文字は「左傳」昭公廿八年に見ゆ。忘不得 不得忘と同じ。傾城色 漢の李延年が歌辭に見ゆ、美人はその色を以て能く人をして城をも國をも傾けしむといへり。

〔義解〕美人の生存中人が之に感ふばかりでなく、死後にもやはりそれに感ふ。非常な美人といふものは人を惑はしてとても忘るゝことができぬ様にさすものである。人は生きてゐるものだ。木でも石でもないから皆情をもつてゐる。情があれば美婦人を見て惑はされるのは當然のことである。惑はされざらんことを欲するならばいつそのこと傾城傾國の美色に遇はぬ方がましである。

〔第三十七〕 陵園妾 託幽閉 諭被讒遭黜也

陵園妾 顔色如花命如葉 命如葉薄將奈何 一奉寢宮年月多

〔題意〕天子の御陵所近き宮中に閉ぢこめられてゐる宮女の身の上にかこつけて、人臣たる者が讒言をうけ地位よりしりぞけられる身の境遇をたとへいふ詩である。序の文或は單に「憐幽閉也」に作る。

〔字句解〕陵園、みさゝぎの御料地。妾、女のめしつかひ。宮女をいふ。如花、美しきをいふ。命、運命。如葉、薄きをいふ。薄命とはふしあはせなり。奉、奉仕すること。寢宮、御陵

所には廟と寢とあり、廟は靈を祭り、寢は其人の平生の居室に擬し生前の衣冠等を藏す、寢宮に奉仕するとは即ち此の御陵の御留守居役をすること。

〔義解〕こゝに天子の御陵に事へる宮女がある。その顔色は美しきこと花のやうであるがその身の上は葉のやうに薄く不幸なものである。さやうに不幸な身の上でこれからさきどうしやうとするのであるか、この御陵の御殿に奉仕してからもはやよほどの年月がたつてゐる。

年月多 時光換 春愁秋思知何限 青絲髮落叢鬢疎 紅玉膚銷繫裙縵

〔字句解〕時光換、四時のありさまうつりかはる。知何限、何限は無限に同じ。青絲髮、みどりの絲なすくろかみ。叢鬢、こきびんのけ。疎、まばら。紅玉膚、紅玉の如く美しきはだ。銷、きゆる。肉のおちること。繫裙、腰にかくるはかま。縵、ゆるやか、瘦せたるによりはかまの身幅の餘りすぎること。

〔義解〕よほどの年月がたち、季節もうつりかはつた。その間春の愁ひ、秋のものの思ひ限りしられぬほどであつた。之がためにみどりの黒かみぬけ落ちてこかつたびんのけも今はまばらになり、紅玉の如き膚も肉やせてこれまで丁度身になつたはかまも今はだるむ様になつた。

憶昔宮中被妬猜、因讒得罪配陵來、老母啼呼趁車別、中官監送鑰門迴。

〔字句解〕 妬猜、ねたみ、そねむ。配陵來、配は罰として流しものにする。趁車、車をおひかけて。中官、大奥に仕ふる宦者。監送、監督しながら送つてくる。鑰、とさす。迴、宮中へもどる。

〔義解〕 過ぎし昔を考へてみるに、かつて宮中で他人から妬み猜まれ、讒言のために罪をうけて此の陵へ流された來た。あのごき老いたる母は啼きさげびつゝ、自分の車の後から追ひかけて別れに來た。又た宦官の人が自分を監督しながらこの御陵所まで送つてきて陵門をござしてかへつてしまつた。

山宮一閉無開日、未死此身不令出、松門到曉月徘徊、柏城盡日風蕭瑟。

〔字句解〕 山宮、御陵の御殿。出、陵殿から外へ出す。松門、御陵所をいふ、松の木など多ければなり。○柏城、これも陵所をいふ、柏など多ければなり。○月徘徊、魏の曹植の詩に明月照高樓、流光正徘徊、とあり、徘徊とはそこゝとなくうごくさまなり、流光とあるにより、徘徊の字使ひ得て妙なり、唐の張若虛の可憐樓上月徘徊といひ、今此の白詩、月徘徊と

いふは月光をいふとせば意ありて辭足らず、字面通りに解釋すれば月その物があちこちうごいてゐることゝなる。甚だ不自然なりといふべし。○蕭瑟、さびしきおとのさま。

〔義解〕 御陵所の御殿を一たび閉されてはいつまた開かるゝとも知れず、我が身の死なぬ限りは門外に出してはもらへぬことである。松の木立ち並ぶあたり、よひより曉へかけて月影いたづらにひらめき、柏の樹生ひしげれるあたり、ひねもすたゝ風の音さびしく鳴る。

松門柏城幽閉深、聞蟬聽燕感光陰、眼看菊蕊重陽淚、手把梨花寒食心。

〔字句解〕 菊蕊、蕊は藥に作るべし、花瓣をいふ。重陽、九を陽の數と見るに由て九月九日を重陽といふ、九の陽が二つかさなる意なり、陰曆九月九日は節句の一にて人々菊酒を飲む例なり。○寒食、冬至の後一百四、五、六の三日を寒食といふ、此間禁火とて炊事に煑焚きをせぬ慣習あり。

〔義解〕 此の松柏の世界へ深く閉ぢこめられ、蟬や燕の聲をきくにつけて時日の過ぎゆくに感じ、菊の花をみては重陽の節に涙を垂れ、梨の花を手にとりては寒食の節に心をいたましむ。



把花掩淚無人見 綠蕪牆遠青苔院 四季徒支妝粉錢 三朝不識君王面

【字句解】把花 上の把梨花を疊用せり。掩淚 涙を兩手でおさへる。綠蕪牆 雜草の生ひかぶさりたるかきね。青苔院 青苔の厚くおきたる奥庭。四季 春夏秋冬。徒支 支は支出すること、徒支とはむだに費すといふこと、お化粧の錢を費て君の寵愛を受け得ればむだに非れども、受け得ぬゆゑ「むだ」といふ。妝粉錢 お化粧の錢。三朝 元日の朝をいふ、元日は歳・月・日・三者の始めゆゑ之を三朝といふとぞ、或は君三代の間とも解しうべし。○君王天子。

【義解】花を手にしながらそつと兩手で涙をおさへかくさんとする、此の様子さへだれも見人としてはなく、苔厚く敷きゑる奥庭の周圍を雜草の生ひかぶさつた垣がとりかこんでゐるばかりである。身嗜みに四季をり〜お化粧錢だけは相當につかつてゐるがかひもないことであつて元日でさへ天子のお顔を知ることがない。(或は三代の御世の間天子のお顔をしらすにすぎた)

遙想六宮奉至尊 宣徽雪夜浴堂春 雨露之恩不及者 猶聞不啻三千人

【字句解】六宮 皇后に屬する宮殿をいふ、大奥のこと。奉 奉仕。至尊 天子。宣徽 殿の名、東内御所の左、銀臺門の西に在り、宣徽殿の西に浴堂殿あり。浴堂 殿の名。○雨露之恩 天子の恩澤のうるほひ。不及 其身に達せぬもの。管 たいに。

【義解】遠く想ひを大奥の方に馳せてみる。大奥の宮女等は天子に奉仕して或は宣徽殿の雪の夜、或は浴堂殿の春の日どかしづき奉つてゐるが、天子の御寵愛の御恩のかゝらぬものが三千人ばかりでなく其以上あるときく。

我爾君恩何厚薄 願令輪轉直陵園 三歲一來均苦樂

【字句解】我爾 我と爾となり、爾汝とは大奥にあり君側に近くゐるものをさす。何厚薄 怪み訝る辭なり、なせにかく厚と薄とがあるか、薄とは自分に就ていふ。輪轉 かはる〜。○直 宿直、ごまり番をすること。均 公平にならず。

【義解】君のお側に居らるゝ人々と自分を比べてみるにどうしてかくも君の御恩に厚薄の差があるのであるか、あまりに不公平である。因て今後はどうぞみなものどもが更る〜御陵の番をすることに、他の人々もせめて三年に一度は此の陵所へ来て苦と樂とを平均して受ける様にさせたいものである。

詩のなまじりたるもの  
此の詩の横濱せるもの  
はまの代もふとつての白しは出

〔第三十八〕 鹽商婦 惡幸人也

鹽商婦多金帛 不事田農與蠶績 南北東西不失家 風水爲鄉船作宅

〔題意〕こぼれ幸を得てゐる者にくみて作れる詩なり。

〔字句解〕鹽商 しほあきうど。婦 つま。金帛 金銭やきぬ。田農 田を耕すこと。蠶績 蠶を飼ひ糸をうむこと。不失家 常に家を有してゐる。風水爲郷 郷とは其の安居の地をいふ。江邊の生活ゆる風や水の世界に住むなり。

〔義解〕こゝにしほあきうどのつまがゐる。彼女は金銭、絹物など澤山もつてゐて、耕作もせず蠶飼ひ絲ごりもせぬ。四方いづれにゆくとても家は有り、風水の世界に住み、船をわが住宅としてゐる。

本是揚州小家女 嫁得西江大商客 綠鬢溜去金釵多 皓腕肥來銀釧窄

〔字句解〕揚州 揚は揚に作るべし、揚州は江蘇省揚州府江都縣治。西江 江西をいふ。綠鬢 みどりの黒髪より成るかつら。溜去 溜とはつるりとすべるをいふ、溜去とは釵を滑かに挿すこと。皓腕 白きかひな。銀釧 銀で造りしうで

すことをいふならん。金釵 黄金のさしかんざしの類。皓腕 白きかひな。銀釧 銀で造りしうでわ。窄 せまし、窮屈なるをいふ。

〔義解〕此の女はもと揚州の貧小の家のもすめであつたが、江西の大商人に嫁入りした。それで黒髪にさしこむ金釵は甚だ多くあり、眞白きかひなもふとつて來て銀の腕輪も細すぎる様になつてきた。

前呼蒼頭後叱婢 問爾因何得如此 婿作鹽商十五年 不屬州縣屬天子

〔字句解〕蒼頭 奴僕をいふ。婢 女中。爾 商の婦をさす。婿 むこ、女の夫をいふ。

〔義解〕この婦は前には僕を呼びつけ後には女中を叱りどばしたりしてゐる。おまへに問ふてみやう、おまへはいかなるわけでそんな境遇になつたか。答へていふ、わたしの夫はしほあきうどをしてゐること十五個年で、州や縣の地方官の支配下にはたゝす、天子御ちきくに御手下になつてゐます。

每年鹽利入官時 少入官家多入私 官家利薄私家厚 鹽鐵尙書遠不知

字句解 鹽利 鹽を拂下げて得たる利得。入官 政府へ納める。官家 政府。私 自己の家。鹽鐵尙書 鹽及鐵の專賣を掌る長官。○遠 都に居るゆゑ遠といふ。

義解 婦の答のつゞき、

毎年鹽の利益を政府へ納入するとき、その利益を政府には少く入れ、自分の家には多く入れる。政府の方は利益が少く自分の家の方には多くする、それでも遠方に居るから鹽鐵尙書はちつともそんなことを御存じない。

何況江頭魚米賤 紅繪黃橙香稻飯 飽食濃妝倚柂樓 兩朵紅頭花欲綻

字句解 賤 値段のやすいこと。紅繪 鯉などのあかい生きづくり。黃橙 きいろいだいだい。香稻 いゝかをりのいね。濃妝 あつ化粧。倚 身をよせかける、もたれる。柂樓 船

尾の柂取りの所は高くあがりて二階をなす、故に樓といふ。兩朵 朵は朶に作るべし、兩片といふがごとし。紅頭 あかきあざと、頬をいふ。花欲綻 美しくしきをたごへていふ。

義解 婦の答のつゞき、

ましてかはべりでは魚も米もやすく、魚の生きづくりに黄色のだいぐ、かぐはしきいねの

ごはんもある。それを十分たべて厚化粧しながら柂樓にもたれてゐる。その左右の紅き頬は花のほころびかけた風情がある。

鹽商婦 有幸嫁鹽商 終朝美飯食 終歲好衣裳 好衣美食來何處 亦須慚愧桑弘羊

字句解 終期 終日の類。美飯食。飯を或は飲に作る。○來何處 この三字を或は有來處に

作る、來何處とはどこからで、來たのかと問ふ辭、その意は「どこからでもない人民の懐からでたのでないか」の意なり、有來處も同意なり。○桑弘羊 人名、漢の武帝の元封元年に弘羊は鹽鐵の專賣、天漢三年に酒の專賣を始め、人民多く之に苦しむ。○慚愧 はづる、其の罪惡弘羊以上なるゆゑ弘羊にも對等に向ふあたはず、愧ちいるべきものなりとの意。

義解 鹽商のつまは幸にあうて鹽商に嫁入りして毎日朝ちう甘美な飯食(或は飲食)をし年中いゝきものをきてゐる。そのいゝきものうまいたべものは全體どこからできたのか、みんな人民の懐中から出て來たのではないか、してみればこの鹽商の如きは漢の桑弘羊に對しても更にはち入るべきものであるのだ。(再案、結句は桑弘羊亦須慚愧の倒置と見、桑弘羊が鹽商に對して愧づべしと解するも可なるに似たり。)

〔第三十九〕

杏爲梁

刺居處僭也

杏爲梁 桂爲柱 何人堂室李開府 碧砌紅軒色未乾 去年身沒今移主

〔題意〕僭の字は當に僭に作るべし、字の誤なり、僭とは下位の者が身分に適せず上位の者のまねをすることなり、

此の詩は人臣たる者の住居の身分不相應に上位に在る者のまねをして豪奢なるを刺らんがために作れり。

〔字句解〕杏、アズの木。梁、はりの木。桂、かつらの木。堂室、ざしき、へや。李開府、

其人未だ詳ならず、或は玄宗の朝の李林甫をいふか。林甫は玄宗の時、右相となり開府儀同三司の待遇を加へらる。又「新唐書」の林甫の傳に薛王の別墅は當時勝麗京師に冠たりしが之を林甫に賜はりたり、他の邸弟・田園・水磴みづぐ等もみな上等なるものを有せりといへり。○碧砌、碧色をぬりたるみぎりの石。○紅軒、あかく塗りかざれるのき。○移主、主人が他へ移住する、すなはち新主人が来るなり。

〔義解〕杏の木を梁とし桂の木を柱とした建築物がある。だれの堂室であらうか、それは李開府の堂室である。そのできたての碧砌や紅軒が色も乾かぬうちに李開府は前年死去してしまひ今や舊主去て新主來るのありさまである。

高其牆 大其門 誰家第宅盧將軍 素泥朱板光未滅 今歲官收賜別人

〔字句解〕盧將軍、其人未だ詳ならず、或は盧從史をいふか。從史は初め澤潞の間に遊び節度使李長榮に用ゐられて大將となる、後ち德宗の朝には昭義軍節度副大使・知節度事となり、憲宗の元和五年驩州の司馬に貶せらる。○素泥、泥は壁土なるべし、素は白色、蓋し胡粉をぬるならん。○朱板、朱色にぬりたる板。○官收、官より之を沒收する、

〔義解〕又此に牆を高くし門を大に構へた邸がある。だれの第宅かといふとそれは盧將軍の第宅である。此の家の白くぬりたる壁や朱にぬりたる板がまだ光りもうせぬうちに今年は政府より之を沒收して別の人に賜はつてしまつた。

開府之堂將軍宅 造未成時頭已白 逆旅重居逆旅中 心是主人身是客

〔字句解〕逆旅、客舎をいふ、上の逆旅は天地を指し、下の逆旅は堂宅を指す。○心是主人身

是客 此の句は心是主人と身是客と、文の形式は相對したるも意のとりかた同じからず、蓋し心是主人とは此第宅を建てし人は自己の内心は其の主人のつもりなるもの義ならん、又、身是客とは實際は自分はその建物の主人でなく、たゞ假りのお客の如きものなりとの意なるべし。

〔義解〕李開府の堂や盧將軍の宅、之を造らんとしてそのまだできぬうちに彼等の頭は早くも白くなつてしまつた。彼等は此の天地といふ大旅館に居ながらまた其の中にて第宅といふ旅館を營んだのであるから旅館の二重住むをしてゐるのだ。その人の心では自分はその第宅の主人のつもりか知れぬが、實際身體は一夜どまりのお客に過ぎぬのだ。

更有愚夫念身後 心雖甚長計非久 窮奢極麗越規模 付子傳孫令保守

〔字句解〕身後 死後をいふ。長 永遠にわたるをいふ。久 長年にわたるをいふ。越規模 規模とは一定の制度をいふ、越とはそれをこえて常度をうち破るをいふ。

〔義解〕この外にまた愚な男がゐて自分の死後のことまで考へる。彼の心は永遠にわたつてゐ

るが惜いかなその計は永久にわたるの計ではない。彼は奢をきはめ麗はしさを極めて建築を爲し、殆ど常度をふみこえるまでの贅澤をして、それを子にも孫にも附與し傳承させて守らしめやうと考へてゐる。

莫教門外過客聞 撫掌回頭笑殺君

〔字句解〕教 俗語「してせしむる」なり、使の字にあたる。撫掌 撫はかるくうつこと、掌は手のひら。笑殺 甚しく笑ふ。

〔義解〕こんなことを門前を通りかゝる人々をして聞かしめるな。若しその人が聞いたならば手のひらをうち頭を回らして君 奢麗の宅を子孫に傳へんとする人のことを甚しく笑ふであらう。

君不見馬家宅尚猶存 宅門題作奉誠園 君不見魏家宅屬他人 詔贖賜還五代孫

〔字句解〕馬家宅 馬燧及其の子暢等が家なり、もと富貴なりしがその邸宅を天子に獻じたり。奉誠園 德宗の時馬暢の獻じたる邸宅を園とし奉誠園と名づく、詳は秦中吟の第三「傷宅」の篇に注す。魏家宅 魏徵の宅なり、。詔贖 白氏の自注に見ゆる如く元和四年に官錢を以

て微が勝業坊の舊宅を贖ひ之をその子係に還へしあたへたりといふ、此事につき白氏文集に論魏徵舊宅狀あり、李帥道といふもの私錢六百萬を出して魏徵の宅を質受けして子孫に與へんごせしに、樂天諫めて天子をして之を爲さしめたるなり、

〔義解〕諸君は見たまはざるか、彼の馬家の宅は今も猶存してゐてその宅門には奉誠園といふ看板がかゝげてあるでないか、諸君は又見たまはざるか、魏家の宅は一たび他人の手に入つたのであるが、詔を以て之を贖ひて五代の孫に還へし賜はつたではないか。

儉存奢失今在目 安用高牆圍大屋

〔字句解〕儉存 儉約なものは滅亡せずして存在す、○奢失 豪奢を極むるものは滅亡す、蓋し儉は魏、馬、等の或點についていひ、奢は李、盧についていふならん、○安用 必要なし、

〔義解〕儉なれば存在するし、侈奢であれば滅亡する。その例は今目前にある。してみれば高牆でもつて大屋をめぐらす必要なんぞないのである。

〔第四十〕 井底引銀瓶 止淫奔也

井底引銀瓶、銀瓶欲上絲繩絕、石上磨玉簪、玉簪欲成中央折、瓶沈簪

折知奈何、何似妾今朝與君別

〔題意〕この詩男女みだらなる行ひをなし相奔るがごときことを止めしむるを主旨として作れり。

〔字句解〕引 引きあぐるなり。○銀瓶 ぎんの水かめ、○絲繩 絲で造りしつるべなは。○玉簪 玉でつくりしかんざし。○成 できあがる。○知奈何 下に疑問詞あるときは知は不知と同じ、不知奈何とはどうしたらよいやらわからぬといふこと。○妾 婦人の男子に對する謙稱。○君 女より情人をさす、

〔義解〕井の底から銀の水かめを引きあげる、水がめが上がりたるときにつるべなはがきれてしまう、石の上で玉の簪をみがく、簪ができんごするころまんなから折れてしまう。瓶は沈む、簪は折れる、さてどうしたものかしらん。これが妾が今君と別れた身の上をつくりのありさまだ。

憶昔在家爲女時 人言舉動有殊姿

〔字句解〕家、父母の家。女、むすめ、處女をいふ。人言、人は世間一般の人々、。舉動、た  
ちるふるまひ。殊姿、特別にうつくしきすがた、

〔義解〕昔し、まだ親の家にて處女であつたころ、世間の人たちは自分のたちるふるまひにつ  
いて特別のうつくしいすがたがあるといつてほめてくれた。

嬋娟兩鬢秋蟬翼 宛轉雙蛾遠山色 笑隨女伴後園中 此時與君未相識

〔字句解〕嬋娟、うつくしきさま。兩鬢、左右のびんのけ。秋蟬翼、うすくてうつくしきをた  
とふ。宛轉、彎曲せるさま。雙蛾、蛾は蛾眉をいふ、蛾の眉はうつくしきを以て美人の眉を

蛾眉といふ、雙さは左右一對をいふ。遠山色、薄く青黛色にて曲線を畫くを以てかくたさへ  
たり。女伴、女のおそびなかま。後園、おくのには。君、情人をさす、

〔義解〕婦人の追憶のつゞき、

うつくしい左右の鬢は薄く美にして秋の蟬の翼のごとく、彎曲した一對の蛾の様な眉は遠山  
の色にまがふ。笑ひさやめきつゝつれの女どもと奥庭であそびたはふる。この時にはまだ君  
と識りあひにはならなかつた。

妾弄青梅倚短牆 君騎白馬傍垂楊 牆頭馬上遙相顧 一見知君即斷腸

〔字句解〕弄青梅、李白の長干行に郎騎竹馬來、遠上弄青梅、とあり、白氏の此四句蓋し李

白より想を得たるなるべし、青梅は青き梅の實。短牆、ひくいかき。傍、そふ。○知、女の  
方にて知るなり、

〔義解〕前のつゞき、

わたしは青い梅の實を弄びつゝひくいかきにもたれてゐる。君は白馬にのつてかきねのしだ  
れ楊に近づいて來た。かきねのほとりと馬の上とで兩人が互にはるかに見かはした。そのと  
き一目で君がわたしのために腸のちぎるゝ思ひをしてくださることを悟つた。

知君斷腸共君語 君指南山松柏樹 感君松柏化為心 暗合雙鬢逐君去

〔字句解〕南山、終南山、長安の南にあり。松柏樹、古辭「蘇小小歌」に我乘油壁車、郎騎青驄

馬、何處結同心、西陵松柏下、とあり。松柏は寒くなりても縁の色をかえぬものなり、之  
を指すは心の永久變らぬことを誓ふなり。松柏化為心、松柏を變じて己が心とするとは、言  
ひ換ふれば心を松柏の色のかはらぬ如くするをいふ。暗、ひそかに、人知れずに。合雙鬢、

白氏の山遊示小妓詩に雙鬢垂未合、三十纔過半、とあり、これ十六歳ばかりの小妓のことをいへり、女子幼時は垂髪なり、少しく長じたるときは左右に鬢をつくりその末を垂れ置くことみゆ、成人となれば鬢を合せ一つとして之を結ぶなり、○逐、雅言のときは逐ひ出す義なり、俗用のごときは趁、追、等の字と同様におひすがる義として用う。追涼といふべきを逐涼といふの類是なり、

〔義解〕君が腸をたつの思ひせらるゝを知つて君と語りあうた。君は南山の松柏の樹を指して心の不變を誓はれた。それで自分は君のその心に感じて、ひそかに髪を成人なみに結び君のあとをおひてでかけたのである。

到君家舍五六年 君家大人類有言 聘則爲妻奔是妾 不堪主祀奉蘋藻

〔字句解〕舍、動詞として見、やどると訓す。大人、情人の父をいふ。有言、異議をとなへる。○聘則爲妻奔是妾、「禮記」内則篇の本文に聘則爲妻、奔則爲妾、聘の禮を備へて正しく迎へし女ならば妻となることが出来る、若し禮を備へず隨意に男子の方に奔り來る如き女は妾の位置におくのみ。○主祀、宗廟の祀りを主とること。「禮記」の昏義篇に婚禮の目的を説きて、

昏禮なるものは二姓の好みを合し、上は宗廟に事へ、下は後世を繼ぐためなりとなせり。○奉蘋藻、奉は神にさゝぐることを、蘋は大萍なり、ドウカメバスのことなりと、藻はシロヨモギ、「詩經」の召南に采蘋・采藻の詩あり、諸侯の夫人・大夫の妻の祭祀を奉ずるに足ることを詠せり、

〔義解〕君の家にいつて五六年もやどつてゐたところ、君が家のお父上はしきりにわたしをいれることについて異議をのべられた。其の趣意は聘したものなら妻であるが勝手に奔り込んだ女なんぞは妾としてみる外はない。この様な女ではとても祖先のお祭りを主どり、神靈の前に蘋藻をさゝぐるには不十分である。

終知君家不可住 其奈出門無去處 豈無父母在高堂 亦有親情滿故鄉 潛來更不通消息 今日悲羞歸不得

〔字句解〕終知、終とは結局、あくまで。奈、奈何と同じ。出門、情人の家の門より出る。去處、ゆくべき場處。父母、女の生みの両親。高堂、さしき。親情、親情を或は情親に作る、從ふべし、情親とは情に於て相親しくせし人々をいふ。潛來、潛とはひそかに逃げだせしこ



と、來は以來の義。消息、たより。歸不得、不得歸に同じ、

〔義解〕 どう考へてみても詰るところは君の家には住んでゐることはできぬとは知りつゝも、さて門外へ出かけたところがゆきどころの無いのはこまつたものだ。我が家のさしきには御兩親もおいでにならぬといふではなく、故郷には親しい人たちも有るには有るのだが、逃げて出して以來さつぱり故郷の方とは音信不通になつてゐるのであつて、今日といふ日になつては悲しいやら羞しいやらどうしても故郷の方へは歸られぬ。

爲君一日思、誤妾百年身、寄言癡小人家女、慎勿將身輕許人

〔字句解〕 寄言、ことばをよせ贈る。癡小、おろかに年はもゆかぬ。人家女、世のむすめたち

○將身、將は俗語、「もつて」なり。○許人、我が身體を他人の手にうちまかす、

〔義解〕 女子の悔悟の意をいふ、

わづか一日のなさけのためにわたしの一生涯の身を誤つてしまひました。世間の年若く經驗に乏しきむすめごたちに申しますがよく氣をつけて決して輕々しく他人にわが身をまかせてはなりません。

〔第四十一〕 官牛 諷執政也

官牛官牛駕、官車漚、水岸邊驅載沙

〔題意〕 當路の宰相をそれとなくいさめるために作る。

〔字句解〕 駕、輓につなぐこと。漚水、長安の東方に流るゝ川。

〔義解〕 官用の牛が官用の車につながれて、漚水の岸邊から驅られつゝ沙を載せてゆく。

一石沙、幾斤重、朝載暮載將何用

〔義解〕 一石の沙は幾斤の重さあるかすいぶんのめかたやらう。これを朝もまた暮も載せてゆくがそも何に用ゐんとするのであるか。

載向五門官道西、綠槐陰下鋪沙隄、昨來新拜右丞相、恐怕泥塗汗馬蹄

〔字句解〕 五門、大明宮の正南なる丹鳳門をいふ。官道、大道をいふ。槐、ゑんじゆ。鋪沙隄、唐の時、凡そ新に宰相を任命したるときは府縣は宮城より其人の私第まで道路に沙もりを

したり。之を沙隄といふ、鋪はその路に沙をしくをいふ。○昨來、來は以來、きのふより今日へかけて。○恐怖、おそる。

〔義解〕牛は沙を載せて五門の大道の西にと向ひ、槐樹のかげで沙隄に沙をしくのである。きのふから新に右丞相が任命されたので泥のみちが丞相の馬の蹄をよごしはせぬかと氣づかはれてのことだ。

右丞相馬蹄、踏沙雖淨潔、牛領牽車欲流血。

〔義解〕以下作者の意をのぶ、

沙をしくば右丞相の馬の蹄は沙をふんできれいではあるが、牛の領は車をひくために血を流さうとしてゐる。

右丞相、但能濟人治國調陰陽、官牛領穿亦無妨。

〔字句解〕調陰陽、「尙書」の周官に三公、論道經邦、變理陰陽、とあり、三公大臣の職は單に人事を治むるのみならず天地陰陽の氣をもやはらげとのふるにありとせらる。○穿、あなのあくこと。

〔義解〕しかし右丞相がたゞよく人をすくひ國を治め陰陽の氣をもとのへるならば、この牛の領に穴があかうともさしつかへは無い。

〔第四十二〕 紫毫筆 誠失職也

紫毫筆、尖如錐、分利如刀、江南石上有老兔、喫竹飲泉生紫毫、宣城、工人采爲筆、千萬毛中選一毫。

〔題意〕直筆直言すべき位置にある者がその職を盡さざるを誠めんがために作れり。

〔字句解〕紫毫、むらさきのはそげ。尖、毛のさき。錐、きり。利、よくきれる、文章の力についていふなるべし。○江南、揚子江の南。兔、うさぎ。喫竹、喫はたべること、喫を或は嚙に作れり、嚙はかむこと。宣城、安徽省宣城縣。工人、筆を造る人。采、採に同じ。

〔義解〕紫毫を以て作つた筆、そのさきのはそさは錐の如く、その能くきれることは刀の如くである。江南の石上に老いたる免がゐて、竹をたべたり泉を飲んだりしてその體に紫毫が生へる。宣城の筆工がその免の毛を採て筆をこしらへる。それには千萬本の毛の中からやう

く一本のほそげを選びだす。

毫雖輕 功甚重 管勒工名充歲貢 君兮臣兮勿輕用

〔字句解〕功 造筆について力を用うること。重 厚きをいふ。管 筆のちく。勒 ほりつける。工名 造筆者の姓名。歲貢 年々のみつきもの。

〔義解〕毫は輕いのであるが之を筆に作りあげる功力は甚だ厚く鄭重をきはめたもので、筆のちくには一々製造者の名をほりつけて之を其の土地からの年々のみつきものに充てゝをる。君も臣も決してかゝる筆を輕々しく用ゐてはならぬ。

勿輕用 將何如 願賜東西府御史 願頒左右臺起居 搦管趨入黃金

闕 抽毫立在白玉墀 臣有奸邪正衛奏 君有動言直筆書

〔字句解〕東西府御史 左右御史臺をいふ、御史は昔は記事の職なりしが後ち非違を糾察する職となれり。願 わかつ。左右臺起居 起居郎と起居舍人をいふ、郎は左史、人君の動止を記す、舍人は右史なり、人君の言を記す、「唐六典」に起居郎、掌錄天子之動作法度、以修記事之史、起居舍人、掌修記言之史、錄天子之制誥德音とみゆ。搦 ざる。趨 は

や足にてゆく。黃金闕 うつくしき小門。抽毫 抽はぬくなり、筆のさやをはらふをいふ。白玉墀 墀の字を或は除に作る、押韻の法より見るときは除の字まされるに似たり、除は階下の土椽をいふ、正衛 唐の制に天子の居を衛といふ、正衛とは御座所に正面するをいふならん。動言 天子の動作言語。「禮記」玉藻に動則左史書之、言則右史書之、とみゆ。直筆 ありのまゝ記す。

〔義解〕輕々しく筆を用ゐぬとはどうすることか。それにはどうぞ此の筆を東西御史臺の二府に賜はりたい、又之を左右臺の起居郎・起居舍人に頒たれたい。彼等は筆を得てそのちくをとりて立派な御門のなかへすゝみ入り、或はさやから毫を抜き出して白玉をかざりし階のそばに立つてゐて、臣下たる者にもし奸邪なことがあれば御座に正しく向ひてその罪狀を奏上し、是は御史についでいふ、人君に言ふ所あり爲す所の事あれば亦それをそのとほりありのまゝつゝみかくさす書く是起居の方に ついでいふ、

起居郎 侍御史 爾知紫毫不易致 每歲宣城進筆時 紫毫之價如金  
貴 慎勿空將彈失儀 慎勿空將錄制詞

〔字句解〕爾、起居郎・侍御史・をさす。不易致、致とは筆をこちらへもち來すをいふ。進筆、進とは進獻すること。空將、將は「もて」なり、この筆をもてといふこと。彈、その罪を鳴らすこと。失儀、官吏の無作法、非禮。〇錄、かく。制詞、天子の仰せの辭、起居舎人は制誥等を起草する職なり。

〔義〕起居郎、侍御史の官にある人々よ。諸君は此の紫毫筆の容易にもち來すこと能はざるを知るならん、毎年宣城より筆を作りて獻上せんとするとき、紫毫の價は黄金の如く騰貴するのである。かゝる貴重なる筆を以て諸君は徒らに官吏の非禮などを彈劾してはならぬ、又徒らに天子の制詞などを録してはならぬ、もつとより以上に重大なることを記述する場合に之を用ゐねばならぬのである。

〔第四十三〕 隋堤柳 憫亡國也

隋堤柳 歲久年深盡衰朽 風飄飄兮雨蕭蕭 三株兩株汴河口

〔釋意〕此の詩は國の亡びたるさまを氣の毒におもひて作れり。

〔字句解〕隋堤、隋の煬帝が大運河の傍に築きたる堤防なり、煬帝の大業元年 西曆六〇五 尙書右丞皇甫謐に命じて人夫百萬を發し通濟渠を開く 即ち汴河の故道なり、汴河は河南省開封府の東に在りしもの、今は廢す、 汴河を引きて泗水に入り淮水に達す、又十萬の民を發して邗溝を開き 邗溝は昔吳王夫差の穿てるもの、煬帝之を利用す、今江蘇省揚州府城北に在り 揚子江に入る。渠溝の廣さ四十間ばかり、左右に堤防を設けて柳を植う。〇汴河口、汴河は上に説けり、口とは其の始まる入口なり、故に此詩は開封の東北汴河の始まらんとするあたりの堤上の柳を見て詠じたるなり。

〔義解〕隋の時築かれた堤の柳の樹がある。それは今日まで長く久しい歳月を経たゝめにみんな衰へ朽ちてしまつて、飄々と風にたゞよはされ蕭々としめやかに雨ふりそゞぎ、僅に二本か三本か、汴河の入口に昔の名ごりをどやめてゐる。

老枝病葉愁殺人 曾經大業年中春

〔義解〕この柳の老いたる枝や、やつれた葉のすがたは看る人をして非常に愁を催さしめる、憶へば此等の衰へた姿もかつては大業年間の春にあつてきたのである。

大業年中煬天子 種柳成行夾流水 西至黃河東至淮 綠影一千三百里

〔字句解〕楊天子 煬帝。成行 行は行列。流水 溝渠の水。西至 至の字を或は自に作る、  
 ○黄河 即ち汴河の始まる處。淮 河の名。  
 〔義解〕大業年間に煬帝が運河の水を夾んで柳を植ゑ並樹をつくつた。西は黄河から東は淮水  
 に達した、その間柳條の緑の影は一千三百里に連なつた。

大業末年春暮月 柳色如煙絮如雪

〔字句解〕末年 大業は十二年間續けり。○春暮 暮春のころ。絮 柳の花、我邦の柳に花な  
 し、支那の柳には之あり、蘆花に似たり。

〔義解〕大業年間の末つかた三月の頃には柳の葉の色は青くして煙の如く花は白くして雪の如  
 くであつた。

南幸江都恣佚遊 應將此樹蔭龍舟 紫髯郎將護錦纜 青蛾御史直  
 迷樓

〔字句解〕幸 行幸。江都 江蘇省揚州府江都縣治、煬帝の離宮を置きし地なり、煬帝は運河  
 によりて長安と揚州との大連絡をはかり、其間に離宮四十餘所を置けり。佚遊 佚は逸に同

じ、何事をもせずにしたのしむこと。將 もて。此樹 堤柳をさす。蔭 おほふ、枝葉の下に  
 留まるをいふ。龍舟 船首に龍形を造れるもの、煬帝は黃門侍郎王弘等を江南に遣はして龍  
 舟及び雜船數萬艘を造らしむ、煬帝に「泛龍舟」の詩あり、舟遊のさまをうたへるものなり、  
 ○紫髯 あかひげ。郎將 官名、船奉行の類。護 守護する。錦纜 にしきのもつな。青  
 蛾 青黛でかいたうつくしい眉。御史 ものかきの役。直 宿直。迷樓 鏡面の反射を利用  
 して其中に入り往かんとする者をして方向に迷はしむる如く建てたる樓、ラビリンスなり、  
 今揚州の西北平山堂の附近にある觀音閣は昔の迷樓の遺址なりといへり。

〔義解〕此の時煬帝は南の方江都の離宮に行幸せられ勝手な遊びをせられる、そのをり定めし  
 此の柳の樹に龍舟を留め葉かげにやすらはれたことであらう。その時にはあかひげの船奉行  
 が錦のもつなを御守護申上げたり、美人の御史が迷樓に御宿直申上げたりもした。

海内財力此時竭 舟中歌笑何日休 上荒下困勢不久 宗社之危如綴旒

〔字句解〕上荒 上は天子をさす、荒は樂みにふけりすさむ。下 人民をさす。勢不久 國家  
 の運勢長つゞきせず。○宗社 宗廟社稷。宗廟は天子祖先の靈を祀る、社は土神を祀り稷は

殺神を祀る。綏旒、旒は旗の周圍につけたるピラ／＼をいふ、このピラ／＼は風が吹けば常に動搖す。

〔義解〕煬帝の舟中での歌や笑ひはいつやむとも知れぬが、天下の財力は此の時すつかりなくなつてしまつた。上の者は歡樂にふける、下たる者は困難をする、これでは國家の運命も長くはつゝかぬ、宗廟社稷の危いことは旗のピラ／＼の風に吹かるゝ有様であつた。

〔煬天子 自言歡樂殊未極 豈知明年正朔歸武德〕 煬天子 自言福祚長無窮 豈知皇子封鄴公

前なる「煬天子」以下十九字は別本によりて補ふ。

〔字句解〕正朔 正月朔日なり、昔は天子が正朔を定む、舊國亡ぶれば新國の天子之を定む。歸武德 武德は唐の高祖の年號、正朔が隋の正朔に非ず武德に歸すとは隋亡び唐之に代るをいふ。福祚 祚も亦さいはひ、福祚とは帝位をいふ。長 長を或・垂に作る。皇子封鄴公 隋の最後の天子恭帝名を侑といふ、煬帝の孫にあたる、唐の武德元年 西曆六一八 之を廢して鄴國公となす、餘は「二王後」篇に注せり、

〔義解〕煬帝は自らまだ歡樂を十分極めぬとおもつてゐたが意外にも翌年は年號が唐の武德となつてしまつた。また煬帝は自ら帝位のさいはひがかぎりなき後世にまで及ぶものとおもつてゐたが、意外にもその皇子實は孫なるも廣くいふなりは唐から鄴國公にとりたてられるに至つた。

龍舟未過彭城閣 義旗已入長安宮 蕭牆禍生人事變 晏駕不得歸秦中  
土墳三尺何處葬 吳公臺下多悲風

〔字句解〕彭城閣 閣を或は閣に作る。彭城閣は煬帝の建つる所にして揚州府甘泉縣の彭城村に在り、閣中に温室ありしといふ。○義旗 唐の李淵等義兵を擧げ煬帝を伐たんとせるをいふ。蕭牆 しづかにさびしきとべい、文字は「論語」季氏篇に出づ、無事とおもはるゝ内部のことをさす、煬帝は宇文化及等の命によりて令狐行達といふ者のために縊り殺されたり。○晏駕 天子の崩御するをいふ、晏はおそきこと、天子死すれば其の車駕容易に出でず、故に死を避けて晏駕といふ。秦中 長安地方をいふ、もと戰國時代の秦の地なればなり。○吳公臺 揚州府甘泉縣の西北四里にあり、雞臺ともいふ、武德元年に江都の守陳稜なる者煬帝を此に葬りしといふ。

〔義解〕煬帝の乗りたまうた龍舟がまだ彭城閣に經過せざるうちに、李淵等の義軍の旗は早くも長安の宮殿に入りこんだ。意外な内部から禍が生じて人事變化し、煬帝は臣下のものに叛かれてその手にかゝり、崩じて長安の都に歸ることができなくなつた。二三尺の土饅頭を築きてどこに葬つたか、といふにたゞその葬地である吳公臺の下に悲しき風が吹きわたるのみである。

二百年來汴河路 沙艸和煙朝復暮 後王何以鑒前王 請看隋堤亡國樹

〔字句解〕二百年 隋の大業元年六〇五から唐の元和四年八〇九までざつと二百年。和煙 和とは共にするの意、和煙は煙と共に在るをいふ。何以 いかなる事物に由りてか。鑒 その成敗の迹をみて戒めとするなり。

〔義解〕二百年このかた汴河のほとりの路で朝も暮も沙はらの草が煙と共にそこに横はつてゐる。後世の天子たるものはいかなる事物に由りて前代の天子の成敗の迹に鑒みる所あるべきか、願くはこの隋堤の亡國の柳の樹を看られんことを、是をよくみればおのづから自ら警戒すべき點が知らるゝのである。

〔第四十四〕 草茫茫 懲厚葬也

草茫茫 土蒼蒼

〔題意〕この詩はあまりに贅澤な葬りを止めしめんがために作れり。

〔義解〕草つばらがひろくとはしてしくつやく。その土色は蒼々をすすんでゐる。

蒼蒼茫茫在何處 驪山脚下秦皇墓 墓中下澗二重泉 當時自以爲深固  
下流水銀象江海 上綴珠光作鳥兔 別爲天地於其間 擬將富貴隨身去

〔字句解〕在何處 在の字を或は此に作る、此の字是なるに似たり。○驪山 山の名、陝西省西安府臨潼縣にあり。○秦皇 秦の始皇帝。○下澗二重泉 「漢書」の劉向傳の向の上疏の文に秦始皇帝、葬於驪山之阿、下澗三泉、上崇山墳、云云とあるによれば澗二を澗三に改め作るべし、白詩の別本にも澗三に作れるものあり、澗とはかたく封じこめること、三重泉とは地を掘りさげて水が三度でるところに達するをいふ。○水銀 江海 「史記」始皇本紀に墓のこを記して以水銀爲百川江河大海、機相灌輸、上具天文、下具地理、又、劉向の上疏に水銀爲江海、黃金爲鳧雁、と見ゆ。○作鳥兔 鳥兔を作れること史傳に見えざるも、或は

之ありしならん。擬、まぢかまへる。隨身、をのが身體にともなひて。

〔義解〕その茫茫蒼蒼たるはいづこぞといふに即ち驪山の麓なる秦の始皇帝の墓である。この墓は下の方は深くほりさげて三重の泉水の湧き出づるあたりに達してそこを封じかためてこしらへた、その時始皇自らは深く固いと信じてゐた。墓穴の内部では下の方は水銀を流して江や海に象り、上の方は珠の光をつつて鳥や兔の形をこしらへたりして、穴の中に全く別天地をつくり、生前の富貴をそのまゝ死後も己が身にともなひ去らんとまぢかまへた。

一朝盜掘墳陵破、龍椁神堂三月火、可憐寶玉歸人間、暫借泉中買身禍、

〔字句解〕盜掘、わるものが盜賊の目的。以て墓穴をはる。墳陵、墓のをか。龍椁、椁は二重棺の外側なるを稱す、龍椁は天子の椁をいふ。神堂、墓中の祭靈所をいふ。三月火、楚の項羽が秦の都を攻め取りその宮室を焼きしとき火三月まで滅せざりしといふ、三月とはその文字を借り來りしなり、墓のみが三個月燃えつゞきしには非ず。歸人間、一たび埋められしものがまた此の世間へもどる。泉中、泉下の墓穴をいふ。身禍、墓穴發掘せらるゝは其身にとりての禍なり。

〔義解〕ところが一朝人手によりて盜掘が始まり陵は破壊せられ、焼かれ、御棺を埋むる所、神靈を祀る所、火災が三個月もつゞいた。氣の毒にも折角埋葬してあつた寶玉の類が復たこの世へよひもどるやうになつた。これは始皇帝はわざ／＼この墓穴といふものによつて一身の禍を買ひとつた如きものだ。

奢者狼藉儉者安、一凶一吉在眼前、憑君回首向南望、漢文葬在灞陵原、

〔字句解〕狼藉、ごりちらしたるさま、墓穴の發掘の類をいふ。一凶、上句の奢と此句の凶とは始皇の墓をさす。一吉、上句の儉と此句の吉とは下の漢文の陵をさす。憑君、憑はよる、たのむ。向南望、南とは長安より方位をたてゝいふ、望は今君ごさすその人が望むなり。漢文、前漢の文帝、葬儀の儉薄なりしことを以て著名なる天子。灞陵原、灞を或は霸に作る、從ふべし、霸陵は長安の東南に在り、文帝の陵なり、原は高地をいふ。

〔義解〕墓を作るに贅澤な者は亂暴狼藉を試みられるし、儉約な者は安全である、一方は凶で一方は吉であるその證據がすぐ眼の前に在る、君にたのむが首を回らして南方に向てながめられよ、漢の文帝の葬られたのは霸陵の高地に於てゝあつて、薄葬であつたゝめに今もその



まゝのこつてゐるではないか。

〔第四十五〕 古冢狐 戒豔色也

古冢狐 妖且老 化爲婦人 顔色好

〔題意〕婦人の餘りにあでやかなるものは能く人を迷はすを以てそれを迷はされぬやう用心させんと作れり。

〔義解〕古い塚に狐がゐて、それがあやしくつやゝかに年ふけて、婦人にばけると顔色がうつくしい。

頭變雲鬟 面變妝 大尾曳作長紅裳

〔義解〕狐の頭は忽ち雲のかつらに早がはりし、面はお化粧したかたちにかはり、大きなしつぽは引きすつて長い紅きもすそにかはる。

徐徐行傍荒邨路 日欲暮時人靜處

〔義解〕狐の美人はそろり／＼と貧乏村の村路によりそつてあるきだす、それは日の暮れかゝるごき人のひつそりしてゐる處で。

或歌或舞或悲啼 翠眉不舉花鈿低 忽然一笑千萬態 見者十人九人迷

〔字句解〕翠眉 あをきまゆ。不舉 眉を垂れる、悲しむさま。花鈿 はなかんざしの類。低 これも頭を傾けて媚びんとするさま。

〔義解〕狐美人は歌ふたり舞ふたり悲しみ啼いたり、眉を垂れたり、花かんざしを傾けたりする。ふどにつこり笑つてさま／＼の様子をして見せる。之を見るものは十人のうち九人までは迷はされてしまう。

假色迷人猶若是 眞色迷人應過此

〔義解〕狐のうその美色が人を迷はすのでさへこのどほりである。眞の美人の顔色が人を迷はすは之よりもまさることであらう。

彼眞此假俱迷人 人心惡假眞重眞

〔義解〕美人の眞も狐の假もともに人を迷はすのであるけれども、人の心では假の方をにくん

で眞の方を貴ぶものである。

狐假女妖害猶淺 一朝一夕迷人眼 女爲狐媚害則深 日增月長溺人心

〔義解〕狐が女のあでやかさのまねをするのは害がまだ浅い、何となればそれは一朝または一夕人の眼を迷はすに止まるからである。之に反して女が狐の媚ぶる様なまねをするのはその害は深いのである、何となれば女の媚は日に月に増長して人の心を溺らさねば止まぬからである。

何況褒姒之色善蠱惑 能喪人家覆人國 君看爲害淺深間 豈將假色同

眞色

〔字句解〕褒姒 褒は褒姒、周の幽王の寵姫なり、幽王其色に溺れて國を亡ぼす、姒は殷の紂王の寵姫姒己なり、紂王亦其色に溺る。蠱惑 蠱は心に疑をおこさすをいふ。豈將 將は「もて」。

〔義解〕況んや褒姒・姒己の如き美人は人の心を疑惑せしむることが上手であつて人の家をも失はしめ人の國をも顛覆させることができる。諸君看よ、害を爲すことの深淺に於ては、ど

うして假色と眞色とを同等に於て見ることができやうぞ、比べものにならぬほど眞の美人が狐のお化けよりも害が深い。

〔第四十六〕 黑潭龍 疾貪吏也

黑潭水深色如墨 傳有神龍人不識

〔題意〕貪慾な官吏が君の權威を笠に着て民を害することをにくんで作れる詩である。

〔義解〕黒々としたふちの水甚だ深くあつて色は墨の様だ。そこに不思議な龍が住んでゐると言ひ傳へられてゐるが一般の人々は知らずにゐる。

潭上架屋官立祠 龍不能神人神之 災凶水旱與疾疫 鄉里皆言龍所爲

〔字句解〕架屋 屋をかまへること。祠 ほこら。神 不可思議の力。災凶 わざはひ、あしきこと、災を或は豊に作る、豊凶ならば耕作によりて殺物のよくできる歳とよくできぬ歳とをいふ。

〔義解〕ふちのそばに屋をかまへて官から祠堂を立て龍神を祭る。龍自身は神であることばで、きぬが人が尊んで之を神にするのである。村の人たちの言ふ所によれば災凶も水も早も疾疫もみんなこの龍のしわざであるといふことだ。

家家養豚漉清酒 朝祈暮養依巫口

〔字句解〕漉 したむ、酒をこすこと。祈 いのる、。養 祈りて求むる所を得るによりその報いとしてお禮にまゐること。依 その言ふなりに従ふこと。巫 みこ、神に事ふる女、  
〔義解〕家ごとに豚を養ひすんだ酒をこして之を神にさゝげ巫の言ふなりに朝には祈り暮にはお禮まゐりをする。

神之來兮風飄飄 紙錢動兮錦繖搖 神之去兮風亦靜 香火滅兮盃盤冷

〔字句解〕紙錢 紙幣の如く紙にて造りし錢、神を祭るとき之を焚きてさゝぐ。錦繖 繖はからかさ、神を迎ふるもの。盃盤 盤は大皿、肉を盛る、盃は酒を盛る。

〔義解〕龍神がおいでになるときには風が飄々と吹き来り、紙錢が吹きこぼされ錦のからかさかゆらぐ。龍神のお立ちになるときには風も靜かに收まり、香の火もきえて盃や盤もつめたくなる。

肉堆潭岩石 酒潑廟前艸 不知龍神享幾多 林鼠山狐長醉飽

〔字句解〕潭岸 ふちのきし、岸を或は畔に作る、。潑 はねどばす、潑を或は滴或は瀝に作る。廟 即ち上文の祠なり。享 さゝげた飲食物をたべること。

〔義解〕ふちべの石には肉がうづだかく置かれる。廟前の草には酒がまきちらされる。さて此の御馳走を龍神はどれだけたべるのであるか、龍神よりも林に住む鼠や山の狐たちがいつまでも酔ひ飽くのである。

狐何幸 豚何辜 年年殺豚將餞狐 狐假龍神食豚盡 九重泉底龍知無

〔字句解〕辜 つみ。餞 食物を與ふること。九重泉 唐の時淵の字を諱みて泉といふ、ふちのここ、九重とは深きをいふ。無 無知乎の義。

〔義解〕狐は何等の幸ぞ、また豚は何等のつみかある。年年豚を殺してその肉を以て狐に與へんとす。狐は龍の神威を假りて豚を食ひつくさんとす、これでも淵のそこにある龍はそのことを知つてゐるのか、ゐないのか。

〔第四十七〕 天可度 惡詐人也

天可度 地可量 唯有人心不可防 但見丹誠赤如血 誰知僞言巧似簧

〔題意〕この詩はうそいつはりのある人をにくみてつくる。

〔字句解〕度 測度すること。量 面積をみつものこと。防 その害をふせぐ。丹誠 まこと  
のこゝろ。簧 笙の舌、それによりて空氣の振動を起すもの。

〔義解〕天も地も測量することができ、人の心の險惡に對してだけは豫防ができぬ。ちよ  
つと見るごその人はまごゝろが血のやうに赤いが、意外にもそのいつはりごとは巧みなるこ  
と笙舌をうごかす様である。

勸君掩鼻君莫掩 使君夫婦爲參商 勸君掇蜂君莫掇 使君父子成豺

狼

〔字句解〕掩鼻 楚の鄭袖が故事なり、鄭袖、楚王に美人を讒言せんごて美人にいふやう、楚  
王は御身を愛するも御身の鼻つきをさらへり、御身王に見えなば必ず鼻を掩へど。美人その

言の如くす、楚王鄭袖に美人が鼻を掩ふわけを問ふ、鄭袖答へて曰く、美人は王の惡臭をき  
らふなりご、楚王つひに美人の鼻を斬らしむ。參商 二星の名、互に相會せざる星なり。掇  
蜂 周の尹伯奇が故事なり、尹吉甫の子に伯奇といふものあり、その母早く亡せしより吉甫  
後妻を娶る、後妻伯奇が己に對して邪心あることを吉甫に讒言す、吉甫信せず、後妻曰く君  
疑はわれその證を示さん君望見せよご。ある日後妻は毒蜂をとり衣のえりにおき伯奇をし  
て之を掇らしむ、吉甫樓上より之を見て大に怒り伯奇を放逐す。

〔義解〕若し人が君に鼻を掩へご勸めても君は鼻を掩ふなけれ、鼻を掩はゞ君が夫婦の親密な  
る間をも參ご商ごの如くかけ隔りしものごならしむるであらう。また人が君に蜂を掇れご勸  
めても蜂を掇ることなけれ、蜂を掇らば君が父子をして豺や狼の如き無情物にかはらしむる  
であらう。

海底魚兮天上鳥 高可射兮深可釣 唯有人心相對時 咫尺之間不能料

〔字句解〕相對 兩人對坐する。咫尺 咫は八寸、尺は近をいふ。

〔義解〕海底の魚や天上の鳥、高く飛んでゐるものでも射ることができ、深 潛んでゐても釣  
りあげることができる。たゞ人の心ばかりは兩人向ひあつてゐるときで、八寸か一尺かの近

き距離に過ぎなくてもあひでの如何はおしはかることができない。

君不見李義府之輩笑欣欣 笑中有刀潛殺人 陰陽神變皆可測 不測人間笑是嗔

〔字句解〕李義府 唐の高宗の朝の宰相なり、其の人容貌温恭にして人と語るに必ず嬉怡微笑す、而して狡險忌刻なり、時の人義府は笑の中に刀ありといへり、又柔和にして事物を害するを以て人之を李猫といへり、○笑中有刀 上に見ゆ○神變 不思議なこと○嗔 嗔徒年切は盛氣也、また本嗔 稱人切に作る、怒也、自詩の別本に嗔を嗔に作るものあり、今嗔の義に従ふ。

〔義解〕諸君見よ、かの李義府の輩はうれしさうにこゝくしてゐるがその笑の中には刀があつてひそかに人を殺すのである、陰陽不可思議の事もみなおしはかることができるけれども、測ることのできぬのは笑ひが(裏面には)怒りであるといふことである。

〔第四十八〕 秦吉了 哀冤民也

秦吉了 出南中 彩毛青黑花頸紅 耳聰心慧舌端巧 鳥語人言無不通

〔題意〕この詩は無實の罪により貪慾なる官吏に害せらるゝ人民をあはれみて作る。

〔字句解〕秦吉了 鸚鵡に似て大なる鳥の名、また結遼鳥ともいふ、廣東 雲南の地に産す、○南中 南方をいふ○花頸 模様のあるくびすち○慧 智慧あること。

〔義解〕秦吉了といふ鳥がある、これは廣東の南あたりから産出する、その彩ある毛は或は青く或は黒く、花模様あるくびすちは紅である、又その耳はさどく心は智慧あり、舌のさき巧みに、鳥の言葉も人の言葉もいづれも能く通じてゐる。

昨日長爪鳶 今朝大鶩鳥 鳶捎乳燕一窠覆 鳥啄母雞隻眼枯 雞號墮地燕驚去 然後拾卵攫其雛

〔字句解〕鳶 トビ○鶩 くちはし○捎 はらふ○乳燕 子もちのつばめ○窠 穴のなかにつかむ○攫 攫雛は雛についていふ。

〔義解〕きのふは爪の長い鳶が來た、けさは大きな鶩の鳥が來た。鳶は巢ごもりの燕をうちは

らうてその穴巢をひつくりかへした。鳥は雞の親どりをついゝてかた眼をつぶれさせた。雞は號んで地におちる燕はびつくりして飛び去る、そのあとで鳶は燕の卵を拾ひ、鳥は雞の雛をつかんでゆく。

豈無鵬與鷃 嗟中肉飽不肯搏 亦有鸞鶴羣 閑立鸚高如不聞

○閑立 閑は閒かに。鸚高 鸚は揚る。  
○閑立 閑は閒かに。鸚高 鸚は揚る。

義解 鵬だの鷃だのといふ鳥が居ないわけではないが彼等の胃袋の中が肉で一ぱいになつてゐて鳶をみながら羽でうたうとはしない。また鸞だの鶴だのもゐるがこれはのつそり立つたり高く舞ひあがつたりして少しも鳶鳥の暴行をきかぬふりをしてゐる。

秦吉了 人云爾是能言鳥 豈不見雞燕之冤苦 吾聞鳳凰百鳥主 爾竟不爲鳳凰之前致一言 安用噪啾閑言語

字句解 能言鳥 よくものをいふ鳥。冤苦 無實の罪にあふ苦。鳳凰 おほごり。噪啾 がや〜。閑言語 むだなはなし。

義解 秦吉了よ、人の言ふ所によれば汝はよくものいふ鳥だといふことであるが、かの雞燕が鳶鳥のためにひどいめにあはされてゐるのをまさか見ないはずはなからう。わたしは鳳凰は百鳥の主人だと聞いてゐる。その鳳凰の前で汝は一言をせぬ様なことならば汝のがや〜いふむだ言葉はすべていりようのないものだ。

此の詩雞燕を人民、鳶鳥を貪吏、鵬鷃を武臣又は彈劾權を有する御史の官、鸞鶴を高位に居る文官、鳳凰を天子に喩えたり。而して秦吉了はすなはち諫官にして國家人民の事に關して論争すべき言職に在るものにとどふ。

〔第四十九〕 鷓九劍 思決壅也

歐冶子死千年後 精靈暗授張鷓九

題意 この詩は人民と天子との間に邪魔物があつて路をふさいでゐる、それでそのふさがりを切り開かんことをおもつて作つたものである。

字句解 歐冶子 古代の越の刀工の名。精靈 たましひ。暗 人知れず。張鷓九 人名。

〔義解〕越の國の刀工歐冶子が死んでから千年の今日そのたましひは人知れず張鷟九といふ者に授けられた。

鷟九鑄劍吳山中 天與日時神借功 金鐵騰精火翻燄 踴躍求爲鏤鄒劍

〔字句解〕吳山 吳の國の山、吳は今の江蘇省。日時 日と時間。借功 劍を造りあげるにつき力を添へる。騰精 精氣を湧きたす。翻燄 ほのふをあふる。踴躍 金鐵が踊りだす、語は「莊子」に本く。鏤鄒劍 昔吳の人干將といふもの歐冶子と師を同うす、吳王闔閭干將をして劍二つを造らしむ、一を干將といひ一を鏤耶といふ、鏤耶とは干將の妻の名なり。

〔義解〕張鷟九が吳の山の中で劍を鑄るや天は時日を與へ神明も之に力を添へたまふ。その鑄るにあつて金鐵は精氣を湧きたせ火はほのふをあふる、鑄型のなかの金鐵はあだかも生命あるかの如く踊りいで、自ら鏤鄒劍の如き名劍たらんことを求むる、

劍成未試十餘年 有客持金買一觀 誰知閉匣長思用 三尺青蛇不肯蟠

〔字句解〕試 ためしに用うる。客 ある人。持金 金錢をもつて。買 鷟九の劍をかふ。閉匣 はこのなかにごちこめられる。思用 劍が自ら用ゐられたいとおもふ。三尺青蛇 すみ

わたれる劍をたどへていふ。蟠 わだかまる、蛇が輪をまく、靜止のありさま。

〔義解〕鷟九の劍はできあがつてから十年餘りつかつたことがない。或る人が金錢を持參してそれを買ひ取つてよく觀た。すると意外にも劍はこれまで匣のなかで閉ちこめられてゐて久しいあひだ用ゐてもらひたいと考へてゐたので三尺の青蛇にも比すべきこのつるぎは決してだまつて匣のなかでうづまいてゐることを欲しない。

客有心 劍無口 客代劍言告鷟九

〔義解〕この或人には心があるが、劍には口がない。それでその或人が劍の代理となつてものをいひ之を鷟九に告げる。

君勿矜我玉可切 君勿誇我鍾可刺 不如持我決浮雲 無令漫漫蔽白日 爲君使無私之光及萬物 蟄蟲昭蘇萌艸出

〔字句解〕君 鷟九をさす。矜 ほこる。我 劍自ら稱す。玉可切 周の穆王西戎を征せしとき西戎昆吾の劍を獻す、その劍は玉を切るごと泥を切るが如し。鍾可刺 鍾鐘通す、刺は斫るなり斷つなり、干將莫耶の劍は鐘を刺るに鈍せざりしといふ。決浮雲 天に浮べる雲を

さりひらく。漫漫、雲のはびこる貌。無私之光、太陽の公平なるひかり。螽蟴昭蘇、萌艸出  
 「禮記」樂記篇に大人が禮樂を擧ぐるときは草木茂、區萌達、螽蟴昭蘇、といへり。螽蟴は穴  
 ごもりのむし、昭は夜があけあかるくなること、蘇はよみがへること、穴より出るときは蟲  
 にどりては夜明けにして且その假死の状態よりさむるときなり。區萌とは草の芽生への屈ま  
 りてのびぬものをいふ、達とはそれがよくのびるをいふ、白詩は達の代りに出といへるな  
 り。

〔義解〕張君よ、この我は玉を切る事ができると矜つてはならぬ、この我は鐘をもさること  
 ができると誇てはならぬ。それよりもわたしを持つて空に浮べる雲をさりひらきて太陽を蔽  
 はしめることなく、君がために太陽の無私の光を萬物に及ぼし、穴ごもりの蟲はめざめよみ  
 がへり、芽させる草はそれよくのびでるやうにさせた方がよろしい。

〔第五十〕 采詩官 監前王亂亡之由也

采詩官 采詩聽謠導人言 言者無罪聞者誠 下流上通上下泰

〔題意〕この詩は前代帝王が何故に國家を亂亡の地に置いたを我が手本として之を見て戒とせ  
 んことを希望するために作つたものである。一本に由の上に所の字あり。

〔字句解〕采詩官 民間の詩を採取する官なり。此の官に就て一言すべし。「禮記」王制篇に依  
 れば周の天子が巡狩されるときには音樂の長官たる大師が諸方の詩をとりあつめて之を天子  
 の前に陳ねて天子は之に由て地方の政教の善惡得失を察するといふてある。如何なる手續に  
 由て詩がとりあつめられたか。「左傳」襄六年に晉の師曠の語として夏書杜預曰く逸書なりと、今世古文「亂征」に列す、の  
 道人以木鐸徇于路とあるを引けり。晉の杜預は道人は行令之官上の命令をふれまはる官であつて木鐸と  
 いふ金の鈴で木の舌がはいつてゐるものを道路にそうてふりならしながら歌謠の言を求め  
 のだと解釋してゐる。杜預に先つて後漢の班固も「漢書」の食貨志に於て孟春之月 行人振木  
 鐸徇于路 以采詩 獻之大師 比其音律、以獻於天子 采詩謂采、取怨刺之詩也と  
 のべてある。班固の文は古書の本文を意譯しながら敘べてゐる様である、道人を行人として  
 あるのと 怨刺之詩だけを采ると限つた點が杜預と同じからざる所である。元の劉瑾は何休  
 の説を引いて、何休云 男年六十、女年五十無子者 官衣食之 使采詩 邑移於國 國  
 以聞於天子」と記してゐる。何休の説を真とするならば子もたすの翁媪が恐くは行人の下働



きとなつて詩や歌をあつめたのであらう。それを大師のところへ集める。大師、之を音律にあはせうたひうる様にして天子にたてまつるといふ順序である。○詞、歌に同じ。導人、言手引きして人にものを言はせる様にする、人民が上たる者を怨み刺る意があつてもそれを隠さず言はせる様にしむける。○言者、無罪聞者、誠、「詩經」の卷首の序に言、之者無罪、聞、之者足以戒、と見ゆ、詩や歌はその中でどんなことを言はうとも言ふ人には罪なく、之を聞く人にとつては戒とするに足るといふのである。○下流、上通、下流は民情の流れをいふ、別本に流を情に作る、○上下、泰、泰は安らかなり、「易」に地天泰の卦あり、陰陽の二氣流通して上下安泰なる象なり、「泰を別本に安に作る、」

〔義解〕昔は詩をとりあつめる官があつた。それは上たる者が詩をとりあつめ歌をきいて人民の情意を尊重し人をして思ふ所を自由に言ふ様にしむけたのである。詩歌で自己の情をうたひのべる場合には、どんなことを言はうともその人には罪なく、其の言の中に取りべき箇所があるならば聞く人は之に由て自分の戒とするに足るのである。かくして民情の流れが上方に通じて塞がることなく上下が安泰となるのである。

周滅秦興至隋氏、十代采詩官不置、郊廟登歌讚君美、樂府豔詞悅君

意、若求興、論規刺言、萬句千章無一字

〔字句解〕十代、周の次に秦、漢、魏、六朝（吳・東晉・宋・齊・梁・陳）隋、あり、大體を數へしなり。○郊廟、天を南郊に祀るとき、宗廟を祀るとき。○登歌、廟の堂上に升りてうたふ歌なり、人の聲を主とし樂音を少くしてうたふ。○讚、ほめる。○君、天子。○樂府、音樂を掌る役所、又たその役所にて作る詩歌をも樂府といふ、樂府の詩歌は敘事を主としておもしろをかしく作りなせるもの多し、○興論、たとへことば。○規刺言、いましめとなるわくいふ文句。

〔義解〕周が滅び秦が興つてからこのかた隋の世まで凡そ十代の間采詩の官は設置せられたことがない。その間郊廟の祀りにあたつてうたはれる登歌は徒らに天子の美德をほめたへ、樂府で作るつやつばい歌詞は天子の意を悦ばすためにこしらへられる。そのやうな詩歌のなかゝらたとへを引いて婉曲に警めるとか、わるくちではあるがてほんとなりたためになるとかいふ様な言葉をさがし出さうとしても千章萬句の中に一字たりとも見出すことができない。

不是章句無規刺、漸恐朝廷絕諷議、諍臣杜口爲冗員、諫鼓高懸作虛器

〔字句解〕 別本に「不是を始從に、漸恐を漸及に作れり。まされるかとおもふ。諍臣、天子と言ひ争ふ臣。杜、ふさぐ。冗員、むだな人数。諫鼓、昔人君を諫めんとするときたゞ太鼓。虚器、無用のかざりもの。」

〔義解〕 詩歌に規刺の意が無いではないが朝廷に議論をし君を諷刺するといふことがなくならんことを恐れるのである。(別本に従へば先づ詩歌に規刺が無いといふ處から始まつてだん)と朝廷に諷議を爲すことが絶えるといふ處までおしすゝむ) 論争すべき臣も口をふさいでむだな人員となり、諫鼓は高く懸けられてはあるが何人もそれを鳴らして諫めるでもなくおかざりものになつてしまふ。

一人負、展常端默、百辟入門皆自媚、夕郎所賀皆德音、春官每奏唯祥瑞

〔字句解〕 一人、天子をいふ。負展、展とは斧の模様を畫いたついたてなり、天子の御座の背面に在り、故に天子は展を負ふ。端默、たゞしくだまり坐す。百辟、辟は君なり、百辟は百官。入門、君の門に入る。自媚、容體をつくるふ。夕郎、黃門侍郎をいふ、日暮に青瑣門に入對するを以て之を夕郎といふ。德音、天子より下さるゝ德惠のことは、敕令其他仁慈に關する敕命は德音なり。春官、禮を掌る官。祥瑞、天子の仁德の結果として出現するめで

たきしるしもの、

〔義解〕 上御一人は斧のついたてをせおつて端然默坐してをられる、百官等は君門に進み入りても自らの容體の品つくりするのみ侃侃諤諤の正論など思ひもよらず、黃門侍郎の賀する所はみな天子より頻りに下さるゝ德音のことであり、禮官が奏上する所はいつもどこそこに祥瑞があらはれたといふ様なことである。

君之堂兮千里遠、君之門兮九重闕、君耳唯聞堂上言、君眼不見門前事

〔字句解〕 君、すべて天子をさす。堂、朝堂をいふ。千里遠、人民との距離の遠きこと。九重闕、いくへにも奥ふかくとざゝれてゐる。堂上、御殿の堂上だけの。門前、宮門以外。

〔義解〕 君の堂は下民より見るときは千里の遠きに隔たり、君の御門は九重の奥にひつこんでゐる。君のお耳にはたゞ御殿内かざりの話しを聞かれてをり、君の眼は一步宮門以外の事を御覽にはならぬ。

貪吏害民無所忌、奸臣蔽君無所畏、君不見厲王胡亥之末年、羣臣有利君無利

〔字句解〕厲王、周の暗君なり、監者を設けて民の己を誘る者の口を塞がんとせし人。胡亥、秦の二世の君、趙高等の言を過信す。

〔義解〕 上のついき、

貪慾な役人どもは人民を害して忌む所なく、奸惡なる臣は君の明を蔽ひて何等の畏れはゝかる所がない。君見ざるか、かの周の厲王や秦の胡亥の末年を。彼の時には臣下のものどもには利が有つても君には利が無いのである。(臣下は私慾を満たすも君は滅亡を招くばかりであるから)

君兮君兮願聽此、欲開壅蔽達人情、先向歌詩求諷刺、

〔字句解〕君、天子をさす。此、下の二句。壅蔽、天子の耳目をおほひふさぎて聰明の用を爲さしめぬ様にする。達、通達する、その事にゆきわたる。

〔義解〕 君よ君よ、どうぞ下のことをおき、下さい。苟も聰明を壅蔽ふものをきり開いて人民の下情に通達せんとおもはるゝならば何よりもまつさきに歌詩に對して諷刺する所のものをお求めになるがよろしい。

附 録

## 秦中吟講義

### 秦中吟并序

貞元元和之際 予在長安 聞見之間 有足悲者 略舉其事 因命爲秦中吟焉

〔字句解〕貞元 德宗の年號。元和 憲宗の年號。長安 今の陝西省西安府、唐の都なり、樂天は貞元十九年より元和十年まで長安若くはその附近に居れり。秦中吟 秦とは戰國時代の國の名、後ち天下を一統して王朝の名となる、秦は長安の北、渭水を隔てたる咸陽に都せり、陝西省は大略戰國の秦の地にあたる、因て長安及び其の近地をひきくるめて之を秦中といふ、今長安及びその近地にて作れる詩なるが故に之を秦中にての吟と題名せるなり。○汪立名は此詩の作を元和五年となせり。

〔義解〕予は貞元から元和年間へかけて長安に住んでゐた。そのあひだに見るにつけ聞くにつ

け十分悲しいことがある。其事がらを少しばかりとりたて、詩によんで、それを「秦中吟」と命名した。

〔第一〕 詩の番號は本書には之なきも便宜の爲め之を補ふ以下同じ 議 婚

〔解〕此の篇は如何なる家の女を娶るべきかにつき意見を述べしものなるが故に「婚を議す」と名けたり。

天下無正聲 悅耳即爲娛 人間無正色 悅目即爲姝 顔色非相遠 貧富則有殊 貧爲時所棄 富爲時所趨

〔字句解〕正聲 聲とは音楽上の聲をいふ、正とは雅正、みやびやかに正しきこと、淫邪の反對なり。○娛 とは己をたのしましむるものをいふ。正色 色とは婦女子の顔色容貌をいふ、正とは端正、きりつとして上品なるをいふ。姝 わかき美女。相遠 甲女と乙女との美醜の差のかけはなれたるをいふ。○貧富 女の家のみづしきと、とめるとなり。○殊 これは貧富のちがひをいふに非ず、その女の境遇事情にちがひができることをいふ。○時 當時の人。

趨 走り向ふ。

〔義解〕この世の中にはこれが正しき音楽上の聲だといふやうなきまつた聲はない、道理上無し非ず普通の人情よりみ 各自の耳を悦ばす聲、それがその人にとりてたのしい聲なのだ。人間社會にはこれが端正な容貌だなどいふなきまつたものはない、各自の目を悦ばす顔だちがあれば、それがすなはちその人にとつての美人だ。甲乙の二人の女ありとしてその顔の美醜に格別の距離があるわけではないが、二人者の貧なると富なるとによりて相異が生ずる。すなはち貧なれば當時の人々に棄て、顧みられない。之に反して富める場合には當時の人々から争うて走り寄られる。

紅樓富家女 金縷繡羅襦 見人不斂手 嬌癡二八初 母兄未開口 已嫁不須臾

〔字句解〕紅樓 紅色をぬりてかざりたる樓。金縷 金色の糸すち。○繡 ぬひとりする。○羅襦 すす絹のそでなし。○斂手 手をすばめて仕事をやめること、上に不の字あればこれは仕事をやめずにつけるをいふ。一説に斂手を婦人が男子に對する敬禮の状とし不斂手を傲慢の

さまごいへり。但し傲慢としては下句の嬌癡と合はず。故に余は仕事をやめぬは寧ろはにかむ姿なりと解す。嬌癡 愛らしく子供らしき。二八 十六歳。須臾 暫時のこと、不須臾とはあまりひまどらぬをいふ。

〔義解〕 うつくしき高どのに住む金持ちのむすめは、金の糸で薄ぎぬのそでなしにぬひどりなどしてゐる、そこへ他人が來てもそれには目もくれず仕事の手もやめず、まこと十六歳になつたばかりの愛らしさ。こんなむすめはおつかさんや兄さんが口を開けて縁談もせぬのに、やがておよめにいつてしまふ。

綠窗貧家女 寂寞二十餘 荆釵不直錢 衣上無眞珠 幾廻人欲聘 臨日又踟躕

〔字句解〕 綠窗 みどりいろにぬりかざりしまど、紅樓に對す、紅に對すれば綠ははでならず。寂寞 さびしき貌。荆釵 いばらのかざし、後漢の梁鴻が妻孟光といへるもの賢女にて荆釵布裙にて貧に甘んじたりとの故事あり。不直錢 直は値と同じ、あたひする、不直錢とは一文のねうちもなきなり。眞珠 しんじゆのたま。幾廻 いくたびも、聘 禮物をいふ、

それを贈りこして女を迎へんとするなり。臨日 日とは婚姻の約束をきめんとするその當日なり、臨とはその日にさしかゝること。踟躕 ためらふ貌、ぐすつくなり。

〔義解〕 ちみな綠色の窗のうちにとだつた貧乏者のむすめは二十歳あまりになつてもひつそりとしてだれもよめにもらはんといふ者もなくて日をくらしてゐる、髪飾りといへば一文の値もないいばらのかざし、衣の上にはしんじゆなどもとよりあるはずもない。人が幾遍も結納でもかはさうとはするが、さて當日になると二の足をふむ者ばかりだ。

主人會良媒 置酒滿玉壺

〔字句解〕 主人 或の家のあるじ、今婦を娶らんとするその人なり。詩なれば假りに設けていふ、だれにてもよろし。會 あつめる。良媒 よい仲うど人。置酒 酒を前へそなへる。玉壺 玉のつば

〔義解〕 こゝに某家の主人あり、仲うど人たちを會合して座敷に宴を張り酒を備へて、その量なみくゞと玉の壺にみたり。

四座且勿飲 聽我歌兩途 富家女易嫁 嫁早輕其夫 貧家女難嫁 嫁

晚孝<sup>オソキモナリ</sup>於姑<sup>ニ</sup> 聞君欲娶婦<sup>キクキミヨクウメトコトメ</sup> 娶婦意何如<sup>ウメトコトメノイハカシ</sup>

〔字句解〕四座 滿座・一座・といふも同じ、その席に列れるすべての賓客をさす。且 しばらく。歌兩途 兩途とは貧富の二方面をいふ。我 樂天自らいふ。嫁 よめにゆくこと。晚 おそいこと。姑 しようどめ。君 主人をさす。婦 よめ、つま。意 主人の心もちなり、貧富いづれより娶らんとするかの意なり。

〔義解〕此の八句は作者よりいふ。

一座の方々、しばし酒をお飲みなく、拙者が貧富の二方面について歌ふをお聴きくださいなよ。金持ちの家のむすめは容易によめにゆける、よめにゆくことは早い。自分の夫を軽くみる。之に反して貧乏者のむすめはよめにゆくにむつかしい、よめにゆくことはおそいがしうどめに孝養をつくす。さて御主人、あなたはよめさんをおとりになるといふが、どちらのはからおもらひになる御つもりか。

〔第二〕 重 賦

厚地植桑麻<sup>コウチウキサンマ</sup> 所用濟生民<sup>コヨウケイセイミン</sup> 生民理布帛<sup>セイミンリフボク</sup> 所求活一身<sup>ソウカウカクイツン</sup> 身外充征賦<sup>ミソトウチウテイヘイ</sup>

上以奉君親<sup>ウヘニホウキミカタ</sup>

〔字句解〕重賦 重く税を課すること。厚地 厚き大地。生民 生ける人々。理 整頓すること。布帛 ぬの、きぬ。身外 我一身に要する以外。征賦 税のこと。奉 たてまつる、ささぐ。

〔義解〕我々が大地に桑や麻を植ゑつける、何のためかといへばそれでもつて生ける人々を濟はんがためである。生ける人々は桑麻を材料として布や帛を整頓する、それは己が一身を活かしてゆかうがためである。そうしてその一身に必要な以外を以て之をお上の税にあて、うへつかた君や親にたてまつるのである。

國家定兩稅<sup>クニカサダムリウケイ</sup> 本意在愛人<sup>ホンイニイハスニヒト</sup> 厥初防其淫<sup>クヱルハツブサメテキニヒト</sup> 明勅内外臣<sup>メイトクノウチノシ</sup> 稅外加一物<sup>ケイゴウカニイツモノ</sup> 皆以枉法論<sup>ミナカマカサメテクニヒト</sup>

〔字句解〕兩稅 夏と秋との二期に納むる税をいふ、徳宗の建中元年に楊炎の意見を用ゐ始めて此法を行ふ。

参考、新唐書食貨志。租調庸之法。以人丁爲本。自開元以後。天下戶籍。久不更造。

丁口轉死。田畝賣易。貧富升降不實。其後、國家修費無節。而大盜起。兵興、財用益屈。而租調庸法弊壞。自代宗時。始以畝定稅。而斂以夏秋。至德宗相楊炎。遂作兩稅法。夏輸無過六月。秋輸無過十一月。置兩稅使以總之。量出制入。戶無主客。以居者爲簿。人無丁中。以貧富爲差。商賈稅二十之一。與居者均役。田稅、視大曆十四年墾田之數爲定。遣黜陟使。按比諸道丁產等級。免鰥寡悖獨不濟者。敢有加斂。以枉法論。

○防其淫 淫とは度に過ぐるをいふ、課税の程度の適法以上に越ゆるを淫といふなり。○勅天子より命じ戒めらるゝなり、○内外 内とは中央の官吏、外とは地方の官吏をさす、○枉法 國家の法則を曲げたるもの。

〔義解〕我が唐の國家が夏秋の二期に納税するの制度を定められしは、その本意は人民を愛するに在るなり、因てその初に於ては税の常度を越ゆることを防がんとて天子より明かに内外の臣下に御命令があり、きまつた税以外にもし一物たりとも餘計につけ加へることがあるならば、さやうな者はすべて國法をまげたものとして論ずるぞといふことであつた。

奈、何歲、月久、貪吏得、因循、浚、我以求、寵、斂、索、無、冬、春、織、絹、未、成、疋、

繰、絲、未、盈、斤、里、胥、迫、我、納、不、許、暫、逡、巡、

〔字句解〕因循 前からの悪い例によりしたがふことをいふ、人民より取りたてをするなり、○浚 ふかくする義、井の中をさらへて沈澱物をとり去り益々之を深くする如く税を取りたるうへにもまた取るをいふ、○寵 天子の寵愛、斂、斂は向ふへどりこむこと、索はこちらよりもとむること、○無冬春 税の法は夏秋の二期なるに此のとりたては冬とも春とも限ることなきなり、○繰 糸をまくこと、○里胥 村長、○納 税ををさむること、○暫 暫と同じ、○逡巡 ためらふ、ぐすくする。

〔義解〕それにどうしたわけか長い年月のたつまゝに、貪慾な役人どもが悪い前例をそのまゝやりつゞけてくることができた。彼等是我々からしほり取るうへにもまたしほりどつて自分が天子に愛せられることを求めるので、我々から取り込むことにかけては冬も春も論じない。絹を織つてまだ一匹にはならず、糸をまいてまだ一斤にはみたぬのに、はや村長が来て我々に納め物をせよとせまり、しばしだにぐすくすることを許さぬ。

歲暮、天地閉、陰風、生、破、村、夜深、煙、火、盡、霰、雪、白、紛紛、幼者、形、不、蔽、老者



體無<sub>レ</sub>溫<sub>レ</sub> 悲喘與<sub>レ</sub>寒氣<sub>一</sub> 併入<sub>レ</sub>鼻中<sub>一</sub> 辛

〔字句解〕天地閉、天地の間に流通する氣がふさがりて流通せなくなることなり、冬はかゝる状態となる、参考、禮記月令篇。天氣上騰。地氣下降。天地不通。閉塞而成冬。○陰風、北よりふく、陰鬱なる風。破村、あはてた村。煙火、焚火の煙や火。霰、あられ。紛紛みだれちる貌。幼者、こどもら。温、ぬくもり。悲喘、かなしきあへぎ。辛、からし、つらきをいふ。

〔義解〕この八句は農家の實生活を寫す、

さて歳の暮となりて天地の氣も閉塞し、北風が貧乏村におこる。夜は深けて火だねもなくなり、霰や雪が白くばらばらと飛び散る。子供等は着物が不十分であるため形體をおほふことができず、老人はからだにぬくもりがない。かなしきあへぎと寒氣とが一緒くたに鼻の中にはいり來つてつらき感じをあたへる。

昨日輸<sub>レ</sub>殘稅<sub>一</sub> 因窺<sub>レ</sub>官庫門<sub>一</sub> 緡帛如山積<sub>一</sub> 絲絮似<sub>レ</sub>雲屯<sub>一</sub> 號爲<sub>レ</sub>羨餘物<sub>一</sub> 隨

月獻<sub>レ</sub>至尊<sub>一</sub> 奪我身上<sub>レ</sub>暖<sub>一</sub> 買<sub>レ</sub>爾眼前<sub>レ</sub>恩<sub>一</sub> 進入<sub>レ</sub>瓊林庫<sub>一</sub> 歲久化爲<sub>レ</sub>塵

〔字句解〕輸、いたす、はこびこむこと。殘稅、まだ納めきらざりし不足の分をいふ。官庫、政府のくら。緡帛、共に「きぬ」のこと。絲絮、きぬいと、わた。○屯、あつまる。羨餘物、羨もあまること。羨餘とは當時地方官より「これは政費のつかひのこりであります」とて奉りたる物をいふ、今日言ふ剩餘品なり、しかしそれは名義上のことにて實際は人民からしほりとりし不當税金なり、官吏が天子の側近に居るもの又は天子自身に媚びんために之を獻上す。参考、文獻通考卷七、土貢、德宗既平<sub>レ</sub>朱泚<sub>一</sub>之後、屬<sub>レ</sub>意<sub>レ</sub>聚斂<sub>一</sub>、藩鎮常賦之外、進奉不已、劍南西川節度使章阜有<sub>レ</sub>日進<sub>一</sub>、江西觀察李兼有<sub>レ</sub>月進<sub>一</sub>、他如<sub>レ</sub>杜亞<sub>一</sub>、劉贊、王緯、李錡、皆徵射<sub>レ</sub>恩澤<sub>一</sub>、以<sub>レ</sub>常賦<sub>一</sub>入貢、名爲<sub>レ</sub>羨餘<sub>一</sub>、至<sub>レ</sub>代易<sub>一</sub>又有<sub>レ</sub>進奉<sub>一</sub>、戶部財物、所在州府及巡院、皆得<sub>レ</sub>擅留<sub>一</sub>、或矯<sub>レ</sub>密旨<sub>一</sub>加斂、或減<sub>レ</sub>剝<sub>レ</sub>吏祿<sub>一</sub>、或鬻<sub>レ</sub>蔬果<sub>一</sub>、往往私自入、所進纔十二三、無<sub>レ</sub>敢問者<sub>一</sub>、刺史及幕僚、至<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>進奉<sub>一</sub>得<sub>レ</sub>遷官<sub>一</sub>、(又見唐食貨志) ○隨月、月々なり。至尊、天子のこと。爾、官吏等をさす。進、進奉すること。瓊林庫、天子のお庫の名、また大盈庫とよぶものもあり。

参考、「資治通鑑」。德宗建中四年冬十月。涇原節度姚合言。將兵五千。至京師。軍士怒其無厚賜。揚言曰。聞壞林大盈二庫。金帛盈溢。不如相與取之云云。胡三省注、引陸贄諫疏曰。二庫、蓋始於玄宗時。二庫、以藏郡國貢獻之物。

〔義解〕きのふ納め不足の税金を持つていつたついでに御庫の門をのぞいて見た。ところが絹帛の類は山のつもるが如く、絹糸、綿の類は雲の屯まるが如くに多量に蓄へられてある。これは役人どもが「お餘り」と名けて毎月々々天子に献上した物なのである。どうして爾等は我々の身體から暖かさを奪ひ去つて目前の天子の御寵愛を買はうとするのであるか。あんな瓊林の御庫へその品物を獻じて入れたところで歳月がたてばちりほこりにかはつてしまふばかりではないか。

〔第三〕 傷宅

誰家起甲第、朱門大道邊、豐屋中櫛比、高牆外廻環、纍纍六七堂、棟宇相連延、一堂費百萬、鬱鬱起青煙。

〔字句解〕甲第、上等の屋敷をいふ、第ごは君より賜はる邸宅の第級甲乙の甲なり。

参考、漢書高祖紀<sup>十二</sup>、女子公主。爲<sup>王先謙曰、爲字疑當在女字上</sup>列侯食邑者。皆佩之印。賜大第室。注、

孟康曰。有甲乙次第。故曰第也。又夏侯嬰傳。賜嬰北第第一。注、顏師古曰。北第者、

近北闕之第。嬰最第一也。故張衡西京賦云。北闕甲第。當道直啓。

○朱門、朱にてぬりたる表門、貴族のさま。○豐屋、大なる屋なり、○中、内部に。○櫛比、くしの齒のやうにならぶ。○廻環、めぐる。○崇崇、かさなる貌。○堂、表座敷。○棟宇、むなぎ、やね。○連延、ながくひきつらなる。○百萬、百萬貫錢なり。○鬱鬱、茂盛の貌。○起青煙、青雲がたなびくなどいふに同じくその建物の高くそびゆるさまなり。

〔義解〕だれの家であるか、たいそう上等な邸宅をかまへてゐるわい。大道にのぞんで朱の門が建てられてある。大きな屋根むねが内部に櫛の齒の如く立ちならび、その外部には高き牆がめぐらされてある。表座敷の建て棟も六つも七つもつみかさなり、そのむなぎがすつと立ちならんでゐる。一つの座敷だけでも經費百萬錢、その聳えたる高屋をこちらよりながめるごさかんに青雲がたちのぼつてゐる。

洞房溫且清、寒暑不能干、高堂虛且迥、坐臥見南山、繞廊紫藤架、夾砌

紅藥欄 攀枝摘櫻桃 帶花移牡丹

〔字句解〕洞房 奥深き部屋。温 冬あたゝかなること。清(本、清に作る今改む)夏すゞしきこと。干 をかす、人の身體の邪魔をすること。高堂 椽の高級座敷。虚 廣大にしてがらんどうなこと。迥 はるか、遠くまで見わたすことができる。南山 終南山、長安の南にあり。紫藤架 架は藤棚。夾砌 砌は石疊みなり、これは堂前の階下まで通ずる路の左右を石にてたゝむならん。夾はその路の兩側をはさむこと。紅藥 紅き芍薬の花。欄 花壇のませがきをいふ。攀枝 攀とは引きたむること。櫻桃 さくらんぼの實。帶花 花のついたまゝ。移 他處から此處の庭へもつてくる。

〔義解〕さて此の邸宅の内部の奥まりたる部屋は冬は温かで夏はすゞしく、氣候に應じてそこにはいるから寒さも暑さも人體を妨害することはできぬ。また高い座敷はがらんどうで遠方まで見わたし得るから、坐はらうが臥さうがそのまゝ、終南山まで見える。廊下のぐるりには藤棚があり、通路のみぎりを夾んでは芍薬のうゑ込みがある。枝をひきためては櫻んぼの實をつみ、花ながらに牡丹を移植して来る。

主人此中坐 十載爲大官 廚有臭敗肉 庫有貫朽錢

〔字句解〕廚 くりや、臺所。臭敗 腐敗して臭くなる。貫朽 昔の錢は中央に孔あり、孔を絲にて貫き通して一とくゝりどす。

〔義解〕この屋の主人はかゝる間に座りつゝ十年の間大官をつとめてゐる。臺所には喰ひ餘りて腐敗した肉があり、庫には使ひきれず絲ざしのまゝ朽ちた錢がほうつてある。

誰能將我語 問爾骨肉間 豈無窮賤者 忍不救飢寒 如何奉一身 直欲保千年 不見馬家宅 今作奉誠園

〔字句解〕將 もつて、俗語なり。我語 以下述ぶる所の語なり。問 主人に向て問ふなり、此の問の字「飢寒」までにかゝる。骨肉 近い血つゞき親族。窮賤 まづしくいやし。忍 人がむごたらしき心がらなるをいふ。飢寒 親族のうゑ、こゝえること。奉 さゝげる。一身 自分一人。保千年 永久に榮華をもちつゞける。不見 汝不見乎の義。馬家宅 唐の馬燧及びその子暢等が家なり、もと宮貴なりしがその邸宅を天子に獻じたり。奉誠園 徳宗の時、馬暢の獻じたる邸宅を園とし奉誠園と名づけたり、その園は長安の安邑里にありしと

いふ、

参考 新唐書 卷百五 馬燧馬暢傳。燧、玄宗時、有武功。家富。暢、燧之子。亦益富。晚爲豪幸。卒。又燧妻詵折產。貞元末。神策中尉楊志廉。諷使納田產。暢死後。諸子無室廬。自託奉誠園亭觀。卽其安邑里舊第云。故當世視暢。以厚富爲戒。云云。○唐朱詩醇、引桂苑叢談曰。馬暢以第中大杏、餽中人竇文場。文場以進德宗。德宗未嘗見。頗怪暢。因令中使。就封其樹。暢懼。進宅。廢爲奉誠園。虎案、余閱桂苑叢談、未見有此一條。○顧氏日知錄卷十三、田宅一條。顧氏注云。白樂天詩。不見馬家宅。今作奉誠園。元微之詩。蕭相深誠奉至尊。舊居求作奉誠園。秋來古巷無人掃。樹滿空牆閉戟門。(注文)餘詳見于黃汝成集釋。

義解 だれかわたしの言葉で以て此の屋の主人に問ひ尋ねてくれるものはないか。おまへの親族などうちに貧賤の人たちがいないか、その人たちの飢寒を救つてやるべきであるのにむごたらしくもほうつて救はずにおいてあるといふやうな人たちが果してないのか、ど。おまへはどうして我身一つにばかり厚くさへげて、それで永久にその富貴榮華を持ちつかけやうとおもつてゐるのか。見よや、彼の馬氏の邸宅でさへ、今は變つて奉誠園となつてゐるでは

ないか。

〔第四〕 傷友

陋巷孤寒士 出門苦恓恓 雖云志氣高 豈免顏色低 平生同門友 通籍在金閨 曩者膠漆契 邇來雲雨睽

字句解 陋巷、むさくろしき小路。孤寒士、ひとり貧乏男。苦、はなはだ。恓恓、なやむ貌。志氣高、氣ぐらゐのたかきこと。顏色低、ふるはぬかほつき。同門、同じ師の門に居りしこと。通籍、籍は竹にて造りしふだなり、それに其人の姓名や人相などをかきしるす、これが宮廷の門内にかけてある、仕官すればかゝるふだが御所まで通達するにより、仕官のこゝを通籍といふ。金閨、閨は門なり、金閨は金馬門のことなりと、漢の時の宮門の名、

参考、漢書魏相傳。霍光夫人顯、及諸女。皆通籍長信宮。注、通籍、謂禁門之中。皆有名籍、恣出入也。文選、謝朓詩、既通金閨籍。注、金閨、金馬門也。籍者、爲二尺竹牒。記其年紀、名字、物色。懸之宮門。案省相應。乃得入也。又江淹別賦。金閨之諸彥。李善注云。金閨、金馬門也。

○曩者 さきには。者の字に義なし。膠漆契 友だちとの仲のよきこと。膠はニカハ、漆はウルシ、古詩に以膠投漆中。誰能別離此。とあり、膠も漆も物をくつゝけるに用う。故に親密なるを膠漆の契といふ。邇來 邇爾に作るべし、字の誤なり、爾來とは「それよりこのかた」なり。雲雨暎 暎は乖と同じ、人が背なか合はせになること、相そむくをいふ、雲雨は分散の形容として用う。雲雨の分散する如く相背くなり。

義解 むさくろしき小路に一人の貧乏男がある。この男は門外へ出づればすこぶる惱める様子をしてゐる。氣位は高いといつても顔付きは振はぬさまなるを免れぬ。この男に昔し同士の友人があるが、その友人は今や仕宦して其の名は御所の門にまでとほつてゐる。二人の間、昔は膠漆のやうに親しき交りであつたが、それより後は雲雨の如く飛び散りて分れてゐる。

正逢<sub>二</sub>下朝歸<sub>一</sub> 軒騎五門西 是時天久陰 三日雨淒淒 蹇驢避路立 肥馬當風嘶 廻頭忘相識 占道上沙堤

字句解 下朝歸 その友人が朝廷より退出して家へと歸りゆくなり。軒騎 馬車をいふ。五

門 唐の東内、大明宮の正南の門たる丹鳳門をいふ。蹇驢 びつこひきのろば、貧乏男の乗れるもの。避路 馬車のために路をよける。肥馬 彼の友人たる役人の車をひく馬。當風嘶 馬も騒げるさま。廻頭 友人が首を横に向ける、見て見ぬふりするなり。忘相識 相識とは見知りあひの間柄なるをいふ、しかし今はそれを忘れたかのやう。占道 我が行くべき道路を我物顔にすること。沙堤 宰相を任命するときその通路に沙をしく、之を沙堤といふ。こゝは今任官せしに非れば單にその通路のことを沙堤といへり。之に由てみるにこの友人は今や宰相の高位にあるものとみえたり。

義解 貧乏男が出てゆくところやうど友人は朝廷から退出して家へもどるところで其の馬車と御所の門の西手でぶつかつた。このときは陰天がついて雨が三日もすさまじくふつたあつた。こちらはどぼ／＼した驢馬に乗りながら路をよけて立つてゐる。あちらはふとつた馬で風に向つて勇しくいなゝき立てる。彼友人はわざとらしく首をあちらへこそむけて、こちらとの知り合ひなるを忘れたかの如く、己がゆくべき道をとりて沙を敷きつめた道に上りてゆく。

昔年洛陽社 貧賤相提攜 今日長安道 對面隔雲泥 近日多如此 非君

獨慘悽 死生不變者 唯聞任與黎

【字句解】洛陽社 晉の董京といふ者逍遙吟詠して常に白社の中に宿したりと、こゝは吟社の類として用ゐしか、

参考、晉書隱逸傳。董京、字威叢。不知何郡人也。初與隴西計吏。俱至洛陽。被髮而行。逍遙吟詠。常宿白社中。時乞於市。云云。又戴延之西征記。洛陽建春門外街道北、有白社。董威叢所住。

○隔雲泥 雲と泥との如く相隔る。慘悽 みじめにものがなし。死生 死生の大難の際にも不變 交情のかはらぬこと。任與黎 白氏の原注に任公叔唐文粹に達に作る黎逢とあり。黎逢は大曆十二年の進士なり、任の事蹟は未詳。

【義解】昔は洛陽の吟社で貧賤なる時には互に手をひきあうた仲だが、今や長安の道では彼と我とは天上の雲と地上の泥ほどに隔たりができた。近頃の朋友間の交情は大抵こんなのが多い君貧乏男ばかりがみじめだといふわけではない。死生の際にも交情のかはらぬほどの者としては任公達・黎逢・ぐらゐのものだ。

〔第五〕 不致仕

七十而致仕 禮法有明文 何乃貪榮者 斯言如不聞

【字句解】七十致仕 仕は事なり、致とは君へおかへしすること。大夫たるもの七十歳に達すれば吾が掌る事を君に返上す、即ち職を辭するなり。「禮記」の曲禮上篇に、大夫七十而致事。鄭玄注云。致其所掌之事於君。而告老。と見ゆ。○禮法 禮に關する規則。明文 即ち上に引ける「禮記」の經文をいふ。貪榮者 榮華を貪る人。斯言 七十致事の語。

【義解】七十歳に達すれば辭職するといふことは禮法にちゃんど掲げてあるのに、慾深の人たちはなんで此の言を聞いたことがないやうなふりをするのか。

可憐八九十 齒墮雙眸昏 朝露貪名利 夕陽憂子孫 掛冠顧翠綏 懸車惜朱輪 金章腰不勝 僂僂入君門

【字句解】雙眸 左右の眼のひとみ。朝露 人生のもろきさま。夕陽 人生の晩暮をいふ。掛冠 冠を君門にかくるなり、辭職のこと。顧 かけりみる、心がのこるさま。翠綏 冠のひ

もの結びて垂れたる部分を綏といふ、ひものことに用う。○懸車、これも辭職することなり。但し君より賜はりし車を懸けて子孫に傳へ光榮を示すためにすると説くものと、單に車を懸けて用ゐずとする説とあり、こゝは不用の義をされるならん。

参考、漢の韋孟在鄆の詩に赫赫天子。明哲且仁。懸車之義。呂洎小子。」漢書薛廣德傳。

廣德之骸骨。賜安車駟馬。懸其安車。傳子孫。注、顏師古曰。懸其所賜安車。以示

榮也。王先謙補註。劉敞曰。致仕懸車。言休息不出也。沙欽曰。白虎通致仕篇。懸車、

示不用也。

○惜朱輪、朱輪は車輪をあかくぬりたる車、二千石以上の官は之に乗る、惜とは今更それに乘れなくなることを惜むなり、○金章、黄金の印章。○不勝、老衰せるゆゑ重くして腰には帯びきれぬをいふ。○僂、背をかゝめること。

義解、氣の毒さうにも八十九にもなりて齒はぬけおち兩眼はくらくなり、朝露の日に乾き易きが如く脆き生命をもちながら名譽利益を貪り、暮れかゝる晩年にいぞみて子孫のことなどを心配する。冠を掛けて官をやめやうとしてはその翠なるひもに未鍊がのこり、車を懸けて最早や乗るまじきかとしては朱の輪を棄てがたくおもふ。金印の重きにたへざる腰つきに

て背く、まゝりつゝ、君の門にはいりこむ。

誰不愛富貴、誰不戀君恩、年高須告老、名遂合退身、少時共嘖誚、晚歲多因循。

字句解、年高、年かさのまさるをいふ。告老、上に引ける「曲禮」に見ゆ。君に對して「年寄りになりましたから」と申し上げること。名遂、功名の志を成しとげたるなり。合、俗語、「まさに何々すべし」とよむ。退身、我身を官途より退かす。少時、わかいとき。嘖誚、わらひ、そしる。○晚歲、晩年。○因循、ぐすくする、その日ぐらしに過ごし勇退せぬをいふ。義、だれも富貴を愛せぬ者はあるまい。だれも君の恩をこひ慕はぬものはあるまい。しかし年が寄つたら隱居すべきだ。功名を成しとげたなら我身を引きこめるべきだ。自分も嘗て少壯であつたときには他人ごともにひこのことをわらひそしつたものでも、いざ我身のことゝなると晩年にはぐすくしてゐるものが多い。

賢哉漢二疎、彼獨是何人、寂寞東門路、無人繼去塵。

字句解、漢二疎、二疎とは疎廣・疎受の二人なり、漢の宣帝の時、二人高官にありしが一朝

職を辭して其の故郷に歸れり、その時洛陽の東門外に見送る人、車幾百輛に及べり、道路の人々之を觀て皆、「賢哉二大夫」と言ひあへりといふ。

参考、漢書疎廣傳。疎廣、廣兄子受。東海蘭陵人。宣帝時、廣爲太子大傅。受爲少傅。在位五歲。太子年十二。通論語孝經。廣謂受曰。吾聞、知足不辱。知止不殆。功遂身退。天之道也。中略、即日、父子俱移病。滿三月賜告。廣遂稱篤。上疏乞骸骨。帝賜黃金二十斤。太子五十斤。公卿大夫。故人邑子。設祖道。供張東都門外。送者車數百輛。辭決而去。及道路。觀者皆曰。賢哉二大夫。

何人、いかなる人ぞ、といふは之を驚歎してほむるなり。寂寞、さびしき貌、あとをつぐ人出でぬによりさびしきなり。東門、洛陽の東門、上に見ゆ。人、後世の人をさす。去塵、過去の車塵の義、二疎が昔そこら車を飛ばして郷に歸つたその塵の跡をいふ。

義解、今の世の官職に戀々たる人々とはうつつかはつて、あの漢の疎廣疎受の二人は實に賢い人々ではないか、あの人たちはばかりはなんであんな人なのであらう。不思議なくらゐだ。彼の人々から以後には洛陽の東門の外の路もひつそりであつて、だれも昔の跡をつぐ人とは無い。

此の詩は作者杜佑杜牧の祖父を諷するなりとの説あり、左に録す。

汪立名曰。「八朝偶雋」。元和初。杜佑爲司徒。年過七十。猶未請老。裴晉公時知制誥。因高郵致仕。令詞曰。以年致仕。抑有前聞。近代寡廉。罕由斯道。蓋譏佑也。公此詩所指。當與裴同。盛爲當時傳誦。厥後、杜牧之每于公多不足語。形之詩篇。至托李叟之言、極口詆誚。文章家報復可畏如此。宋祁不察。据以論公。牧之、佑之孫也。

〔第六〕 立 碑

勛德既下衰、文章亦陵夷、但見山中石、立作路旁碑、銘勳悉太公、敘德皆仲尼、復以多爲貴、千言直萬貲

字句解、勛、勳、勳は勳の古字、いさをし、人の行に就ていふ。下衰、くだり衰ふ。陵夷、丘の土が次第に減じて卑くなる如く次第に衰へること。銘勳、銘とは韻文を用ひて記すこと。太公、周の呂尙即ち太公望のこと、太公望は武王の軍師として殷の紂王を討ち滅したり。敘德、敘とはのべること。仲尼、孔夫子の字なり。多、字數の多きこと。直、値と同じ。萬貲、



貨は財貨なり、萬貨は多くのたから、せに、をいふ、碑文の報酬なり、

〔義解〕近代に於ては人間の勳功や德行といふものが下り衰へて来た。その勳徳を記述する文章も亦段々と下り坂になつて来た。たゞ見る所、山の中の石が切り出されて路ばたの碑として立てられる。碑文にその人の勳功が銘せられるがそれを見ると其人が周の太公望の様にしている。又其人の徳を敘述してあるがそれを見ると其人が孔夫子みた様な人としてある。それのみならずなんでも文字の数が多くあることを貴いことにして辭の数は千言を費し、その値は萬を以て數へるほどの錢を以て報いられてゐる。

爲文彼何人 想見下筆時 但欲愚者悅 不思賢者嗤 豈獨賢者嗤 仍傳後代疑。古石蒼苔字 安知是愧詞

〔字句解〕嗤 わらふ。後代疑 碑文には虚飾のことを書きならぶにより後の世の人之を見れば疑を生ず。愧詞 其人にとりては愧づべきの辭。

〔義解〕碑文の作者はたい如何なる人か、想像するに彼は筆を下すときにはたゞ愚人が悦ばんことをおもふばかりで、賢人は之をわらふことを考へず。賢人にわらはるゝばかりではな

く、後世の人に疑のたねをのこし傳へるのである。してみれば古びた石の青苔のはへた文字は、碑の主人にとりては愧づべきの文字である。碑文作者はこの事には氣がつかぬ。

我聞望江縣 麴令撫惇嫠 在官有仁政 名不聞京師 身歿欲歸葬 百姓遮路岐 攀轅不得歸 留葬此江湄

〔字句解〕望江縣 安徽省安慶府望江縣治なり。麴令 縣令麴信陵といへる人なり。撫 愛撫すること。惇嫠 惇は單獨の民をいふ、嫠は嫠に作るべし、寡婦のこと。歸葬 故郷へかへり葬る。百姓 人民。路岐 岐は歧に作るべし、歧はわかれみちなり。攀轅 車のかち棒にすがること、ゆくてを遮りてやらじとするなり。留葬 望江の地に留まり葬る。江湄 湄はほとり、

〔義解〕わしは聞くに望江縣では縣令に麴信陵といふ人があつて、その人は獨りものや、やもめをなでいつくしみ、官に居て仁慈の政が有つたが、その名は都までは聞えない。この人が死してその故郷に歸り葬らうとしたとき、人民たちは路のちまたをさへぎり、車のかち棒がつて之を引きどめたために、どうも歸ることができずそのまゝこの江のほとりに葬るこ

とになった。

至今道其名、男女涕皆垂、無人立碑碣、唯有邑人知。

【字句解】道、いふ。碣、圓き自然石。邑人、縣民なり。

【義解】今日になつても其人の名を言ふときは、男も女もみな涕をたれる。ところがだれもこの人のために碑なり碣なりを立て、くれる人は無く、この人の徳行はたゞその縣民たちが知つてゐるだけである。

碑を立てる價値の無きものは不似合ひの碑を立て、價値ある人は一片の石だも立てられぬ。

参考、麴信陵に關する紀事、

少年寓無錫時。從錢仲仲大夫借書。正得信陵遺集。財有詩三十三首・祈雨文三首。信陵以貞元元年、鮑防下及第。爲第四人。以六年、作望江令。讀其投石祝江文云。「必也、私欲之求、行于邑里。慘黷之政、施于黎元。令長之罪也。神得而誅之。豈可移于人、以害其歲。」詳味此言。其爲政、無愧于神天、可見矣。至大中十一年。寄客鄉

貢進士姚贊。以其文、示縣令蕭演。演輟俸買石刊之。樂天十詩。作于貞元元和之際。距其亡、十五年耳。而名已不傳。新書藝文志、但記詩一卷。略無他說。非樂天之詩。幾于與草木俱腐。乾道二年。歷陽陸同、爲望江令。得其詩于汝陰王廉清。爲刊板而致之郡庫。但無祈雨文也。宋洪邁容齋隨筆、五筆之卷七、

麴信陵の祠堂に關する紀事、

「寰宇記」、麴令祠堂。在望江縣北三百五十步。按「唐登科記」。麴信陵、貞元元年、進士擢第。本縣圖經云。爲茲邑令時亢旱。精誠祈禱。刊文于石。沈于江中。神明立降甘雨。貞元五年。百姓感其恩。立祠祭祀。「才調集」宋邦綏補註卷一、

〔第七〕 輕 肥

意氣驕滿路、鞍馬光照塵、借問何爲者、人稱是內臣。

【字句解】意氣驕、下に言へる内臣の意氣甚だ驕慢の態なり。滿路、驕りの氣が過ぎゆく道路に、ばいになる。鞍馬光、光とは立派ないでたちゆゑひかりかやくばかりなるさま。照塵、路上にのぼる塵をてらす。借問、かりにとふ。何爲者、いかなることをする者ぞ。内臣、

天子の奥向きに仕ふる臣、唐の制度にては内臣多く軍隊を監督す、故に下節にいふ如く大夫も將軍もその軍中の宴に赴くなり。輕肥 題の輕肥とは輕衣肥馬を略していふ。

〔義解〕馬上ゆたかに路ゆくものがある。そのもの、意氣といは、驕りてあたりもせましといはんばかり、鞍おきたる馬の飾りはその光り飛ぶちりほこりをも照らすかと怪まる。一體それはいかなるものかとたづぬれば、あれは奥向きに仕ふる臣だと人はいふ。

此の四句主人役たる内臣をいふ。

朱紱皆大夫 紫綬或將軍 誇赴軍中宴 走馬去如雲

〔字句解〕紱は革にてつくりたる前垂れなり。○大夫 卿の下、士の上に位する官なり。○紫綬 むらさきのひも、綬は印のひも、金印を結ぶもの。○軍中宴 内臣の催す軍中の宴。○如雲 その多くむらがるをいふ。

〔義解〕朱革の前垂れをつけたる人々はいづれも大夫の身分のものであり、紫の印綬を結べる人々はごもすれば將軍の職にある人たちだ。大夫といひ將軍といひ軍中の宴會に赴くことを誇りがに、馬を走らせて去ること雲の如く澤山である。

樽罍溢九醞 水陸羅八珍 果擘洞庭橘 膾切天池鱗 食飽心自若 酒酣氣益振

〔字句解〕罍 モタヒ、タル、○罍 大なる酒壺、一斛を容る、雲雷を刻畫するによりて名く。○九醞 九たびかもしたるさけ。○水陸 水上のもの、陸上のもの。○羅 つらぬ、ならべること。○八珍 「周禮」の膳夫職に見えたり。一は淳熬、陸稻の飯を鹽及び膏にていためたもの、二は淳母、黍の飯を上と同様にせしもの、三は炮豚、まる豚のフライ、四は炮牂、まるの牡羊のフライ、五は擣珍、牛羊鹿等のヒレ肉のたき、六は漬、薄切りの牛肉の酒づけ、七は熬、香料をつけたこがし肉、八は肝膾、狗の肝をその腸の間の脂でいためたもの、又參看禮記内則篇、○果 クダモノ、○擘 手にてつんざく。○洞庭橘 洞庭は蘇州府にある太湖の洞庭山、橘は密柑、○膾 うをなます。○天池鱗 天池とは大海のこと「莊子」逍遙遊篇に南冥者天池也とみゆ、鱗はウロコ、こゝは魚をいふ。○心自若 自若は平氣なるさま、いかに御馳走にあうても驚かぬ。○氣益振 ますく、元氣づく。

〔義解〕宴席では酒だるに幾度もつくりこんだ酒があふれてをり、水陸からとつた材料で種々

様々の御馳走がならべ出される。果物は洞庭山の密柑を手裂きにし、なますは大海の魚を切りさいなむ。かゝる珍味にたべあきても平氣であり、酒興盛なるにつれて元氣ます／＼振ふ。

是歲江南旱 衢州人食人

字句解 江南 揚子江の南方の地、○旱 ひでり、○衢州 今福建省にあり、

義解 他の方では如何といふに、この歳南方では日でりがあつて作物がどれす民飢俄にせまり、衢州では人が人を食べたといふ状態である。

〔第八〕 五 絃

清歌且罷唱 紅袂亦停舞 趙叟抱五絃 宛轉當胸撫

字句解 清歌 すんだ聲でうたふた。且 まあ。罷唱 となへることをやめよ。紅袂 あかきそで。停舞 舞ふことを中止せよ。趙叟 趙といふ人、名は壁とよぶ、○五絃 琴の種類の名。宛轉 手をうごかす貌。撫 つる糸をなでさする、

義解 歌ふ人は歌ふをやめよ、舞ふものも袂をひるがへすことなかれ。いま趙老人は五絃琴

を抱きて、胸の處のあたりて手をうごかしつゝ絃いごをさすりつゝあり。

大聲轟若散 颯颯風和雨 小聲細欲絕 切切鬼神語 又如鵲報喜 轉作猿啼苦 十指無定音 顛倒宮徵羽

字句解 轟 粗と同じ、あらく大まかなこと、○颯颯 風雨の聲のさま。切切 聲の急なる貌。鬼神語 幽冥界に赴きたる人が物語りする。鵲報喜 鵲はカササギ、鵲が鳴きさはげば旅人が歸つてくるといふ民間信仰あり、喜ばしきを報ずとはそれをいふ、

参考、「西京雜記」卷三、陸賈曰。乾鵲噪而行人至。蜘蛛集而百事嘉。

○轉 うたゝ、いよ／＼。猿啼苦 猿のなきかたの苦しうなること。○無定音 一定の音なし、いろ／＼にかはること。顛倒 順序をひつくりかへす。宮徵羽 支那は音調を五種にわかつ、宮商角徵羽これなり、

義解 五絃から生ずる大きな聲はあらくして散するがごとく、雨まじりの風が颯颯と吹きおこるに似たり。小さな聲は細くして絶えなんとするにも似て、ひし／＼と急なること冥界の人の話し聲のごとし。又或は喜ばしきことを告げ知らすといふ鵲の鳴き聲のごとし、さらに

また猿の苦しうな啼き聲にも似たり。その調子の變化は宮の調、徵の調、羽の調、いろいろ順序をたがへて十本の手の指のふるゝところ定まれる音とては無し。

坐客聞此聲、形神若無主、行客聞此聲、駐足不能舉、嗟嗟俗人耳、好今不好古、所以綠窗琴、日日生塵土、

〔字句解〕形神、形體と精神。無主、支配するものなし。今、當今の流行の音。古、古音。所以、故に。綠窗琴、綠窗はみどりにぬりたるまど、貧家の窓をいふ。樂天自家の古琴を綠窗琴といへるが如し。「才調集」には綠を北に作り、北窗琴ならば晋の陶淵明の故事にて、淵明が夏日北窗の下にてかきならす無絃琴をいふ、無絃琴は古音の極端なるもの。○生塵土、塵土はちりほこり、愛撫せざる故に琴には塵生ず、

〔義解〕席についてゐる人がこの趙璧の琴聲をきけば、身體も精神も支配者を失ひたるが如く、路ゆく人がこの聲をきけば足をどやめて歩をあぐるこゝあたはず。嗚呼俗人の耳は今の音を好んで古の音を好まず、それゆゑに我が貧家の古琴（或は淵明のなでし如き無絃琴）の類には日々塵埃がたかるのである。古調は到底世俗には喜ばれぬ。

新樂府の「五絃彈」の篇を併せて見らるべし。

〔第九〕 歌 舞

秦城歲云暮、大雪滿皇州、雪中退朝者、朱紫盡公侯、貴有風雪興、富無飢寒憂、所營唯第宅、所務在追遊、

〔字句解〕秦城、長安の城をいふ。皇州、都をいふ。退朝者、朝廷より退出するもの。朱紫、印綬の色。銀印は朱綬、金印は紫綬。追遊、人のあそびをおひてあそぶ、

〔義解〕長安も歳の暮となつた、そのとき都一ぱいに大雪がふつた。その雪の中を朝廷からさがつてくる人々を見ると、朱綬紫綬を帯びた人たち、いづれも公とか侯とかいふ身分の高い人々である。貴きものは風雪にあひても之に對するおもしろみがある。富めるものは雪がふつても飢寒の心配は無い。彼等の營む所のはどうして立派な第宅を設けるかといふことであり、彼等の務むる所はどうして人の所へいつて遊ばうかといふやうなことである。

朱門車馬客、紅燭歌舞樓、歡酣促密坐、醉暖脫重裘、秋官爲主人、廷尉

居上頭 日中爲樂飲 夜半不能休

【字句解】朱門 富貴の家の門。車馬客 車馬を驅て來る賓客。紅燭 あかき蠟燭をともす。歡酣 おもしろさが盛になる。促密坐 密坐は膝つきあはせてすはること、促は他人をうながして前へ席をすゝめさすなり。脱重裘 裘は毛皮のきもの、重は幾枚もかさねてゐること、脱はぬぐこと。秋官 司法官のこと、即ち下句の廷尉をさす、「周禮」にては官職を天地春夏秋冬の六部に配當す、司法官は秋の部に入る、故に秋官といふ。主人 その宴のあるじ役。廷尉 官名、秦・漢の時の法官を廷尉と呼べり、隋・唐は廷尉と稱せず大理寺を設け其の長官を卿とす、こゝにいふは大理寺卿または少卿のことなり。上頭 上席。樂飲 おもしろく酒を飲むこと。

【義解】朱の門ある富貴の家では車馬の客が集まつて、紅燭を燃し樓上に歌舞をやつてゐる。興さかんになるとお互に席前へこのり出し、酔うて暖かくなればかさねぎした皮ごろもをぬぎすてる。この家のあるじは司法官で大理寺卿の役をつとめ、上席に陣取つてゐる。日中から飲みつゞけて夜なかになつてもまだ休止することができぬ。

豈知閹鄉獄 中有凍死囚

【字句解】閹鄉 地名、河南省の陝州に屬せり。獄 牢屋。凍死 こゝえて死ぬ。囚 めしうど、ごらはれの罪人、

【義解】彼等はどうして閹郷の牢屋でこゝえ死にした囚人のあることを知らうや。彼等の眼中にはそんなものは無い。

〔第十〕 買 花

帝城春欲暮 喧喧車馬度 共道牡丹時 相隨買花去

【字句解】帝城 長安の城。喧喧 やかましく。度 經過するをいふ、わたる。共道 ともにいふ、人々が相共に語るなり。相隨 甲は乙の、乙は丙のあとにとつきしたがふ。買花去 花をかひにゆく、

【義解】長安の都の春も暮れんとするころ、往來にはがや／＼と車馬がゆきすぎる。何であるかといふと、皆々今が牡丹の咲く時だといつて人のあとから／＼と花を買ひにでかける、

貴賤無常價、酬直看花數、灼灼百朵紅、  
淺淺五束素、上張幄幕庇、旁織籬護、  
水洒復泥封、移來色如故、

【字句解】貴賤 たかい、やすい、○常價 きまつたねだん。○酬直 直は値と同じ、花に對する報酬としての價金、○看花數 花の數次第。○灼灼 あかくかやく貌。○百朵紅 一株に百本も枝のついた紅牡丹。○淺淺 「易」の賁の卦に東帛淺淺とみゆ、注に淺小の意なりといへり。束素の素は白き練らぬきぬ、束はその卷物をたばにせるもの、これは白絹の卷軸を五本あつめたる横断面と見て可ならん、つまり一枝に五箇の小白花を著けたるものを形容して言ふなり、○幄 上部に張る幕をいふ。○幕 側面に張るものをいふ。○庇 おほふなり。○旁 側面をいふ。○籬 竹の小枝のまゝ結ぶかき。○護 まがき、○護 保護する、○水洒 水をそゞぐ。○泥封 根もごに泥土をもりあげる。○移來 我が園へ移してくる、

【義解】牡丹にはたかいかもやすいも、きまつた値段はなくして、花の數次第である、花多ければ價貴く、少ければ價賤し、一株に百枝といふ火のもえる様な紅花もあれば、こまかく一枝五箇といふ小さな白花もある。これ等を買つて、その上部は幕を張つておほひ横側は籬を

結んで保護し、水をそゞぐやら、泥土を盛るやら、我が庭へ移植しても少しも色はかはらぬやうにする。

家家習爲俗、人人迷不悟、有一田舍翁、偶來買花處、  
低頭獨長歎、此歎無人諭、一叢深、色花、十戶中人賦、

【字句解】俗 ならばし。○田舍翁 むなかの老人。○諭 さとる。○深、色 こきいろ。○十戶 十軒の家。○中人 中流財産の人、○賦 税金、

【義解】どの家も牡丹買ひのならばしとなり、どの人もたかい花を買ひながらその迷へること気がつかぬ。こゝに一人のむなかの老人があつて、ふと人々が花を買ふ處へ來た。この老人は頭をたれて獨りでためいきをついてなげいてゐる。彼がなげく心持ちをだれもさとる人はない。その心はかうだ、一むらの色こき牡丹の花、その花を買ふ錢は中流の財産の家の十軒ぶりの税金に相當するといふのである。

本篇は新樂府の「牡丹芳」と併せ見らるべし。

参考、牡丹に關する紀事

「通志略」、牡丹初無名。依芍藥得名。故其初曰木芍藥、牡丹晚出。唐始有聞貴游競趨云。「唐國史補」、京城貴游。尚牡丹。每暮春。車馬若狂。種以求利。一本有直數萬者。

「才調集」宋邦綬補註、

歐陽公牡丹釋名云。「牡丹初不載文字。唐人如沈·宋·元·白之流。皆善詠花。當時、有一花之異者。彼必形于篇什。而寂無傳焉。唯劉夢得、有「詠魚朝恩宅牡丹」詩。但云「一叢千朵而已。亦不云其美且異也」。予按、白公集。有「白牡丹」一篇十四韻。又秦中吟十篇、內「買花」一章、凡百言云。共道牡丹時。相隨買花去。一叢深色花。十戶中人賦。而諷諭樂府。有「牡丹芳」一篇。三百四十七字。絕道花之妖豔。至有「遂使王公與卿士、游花冠蓋日相望。花開花落二十日、一城之人皆若狂、之語又寄微之百韻詩云。唐昌玉蕊會。崇敬牡丹期。注、崇敬寺牡丹花。多與微之有期。又惜牡丹詩云。明朝風起應吹盡。夜惜衰紅把火看。醉歸盪屋詩云。數日非關主事繁。牡丹花盡始歸來。元微之有入水壽寺看牡丹詩八韻。和樂天秋題牡丹叢三韻。酬胡三詠牡丹一絕。又有五言二絕句。許渾亦有詩云。近來無奈牡丹何。數十千錢買一窠。徐凝云。三條九陌花時節。萬馬千車看牡丹。又云。何人不愛牡丹花。占斷城中好物華。然則元白未嘗無詩。唐人未嘗不重此花也。

「容齋隨筆」卷二、

虎案 白集洪氏所引外、更有看憚家牡丹花戲贈李二十七絕長慶集卷十三重題西明寺牡丹七言六句長慶集卷十四微之宅殘牡丹七絕同上白牡丹七絕同上卷十五



### 秦中吟考異

議婚

才調集、標題作貧家女、

○悅耳即悅目即 才調集、兩即字作則、○已嫁 才調集、已作言、

重賦

才調集、作無名稅、

○所用 唐文粹、用作要、○定兩稅 才調集、定作有、○在愛人 汪本校云。愛一作憂、案、唐文粹作憂、○明勅 唐文粹勅作敕、○浚我 才調集、浚作役、○練絲 才調集、練作縑、○迫我納 汪本校云 迫一作逼、案、才調集作逼、○斬逋巡 才調集唐文粹、是作暫、○煙火盡 唐文粹盡作滅、○殘稅 才調集殘作餘、○隨月 才調集月作日、

傷宅

才調集作傷大宅、

○大道邊 才調集大作當、○高牆 唐文粹牆作墉、○崇崇 才調集崇作余、○棟宇 才調集棟作簷、○温且清 案 清當作清 諸本皆誤、○高堂 才調集堂作亭、○貫朽

才調集作朽貫、○窮賤者 才調集唐文粹、作貧、

傷友

又云、傷苦節士、才調集作膠漆契、

○孤寒士 才調集孤作飢、○苦恹恹 才調集苦作甚、才調集婁堅本恹作恹、○雖云 才調集云作然、案非是、○同門友 汪本校云、門一作袍、案才調集作袍、○曩者 才調集作昔爲、邇來 唐文粹邇作爾、是也、○忘相識 才調集忘作望、○任與黎句下原注任公叔叔字唐文粹作達、婁堅本作孫、

不致仕

才調集作合致仕、

○貧榮者 才調集者作貴、○入君門 唐文粹君作公、○須告老 才調集告作請、○嗤 誚 才調集誚作笑、

立碑

才調集作古碑、

○勛德 才調集唐文粹勛作勳、○山中石 才調集山中作南山、○立作 才調集立作刻、○銘勳 才調集作勳銘、○敘德 才調集作德敘、○安知 才調集安作焉、○愧詞 唐文粹詞作辭、○撫髻髮 才調集髻作孤、才調集唐文粹髮作髮、○路岐 唐文粹岐作歧、

是也。不得歸。才調集。唐文粹。唐詩紀事。歸作去。

輕肥 才調集作江南旱。

○人稱。唐文粹稱作言。○是內臣。才調集內作近。○或將軍。汪本校云。或一作悉。案才調集作悉。○軍中宴。才調集作中軍會。○去如雲。才調集去作疾。○胎。才調集作鱗。

五絃 才調集作五絃琴。

○且罷唱。才調集罷作停。○當胸撫。才調集當胸作胸前。○麤。才調集作祖。疑粗字訛。○猿啼。唐文粹作嘯猿。○宮徵羽。才調集徵作商。○不能舉。才調集舉作去。○綠窗琴。才調集綠作北。

歌舞 才調集作傷闕鄉縣囚。

○秦城。才調集唐文粹城作中。○歲云暮。才調集云作日。案非是。○風雪興。唐文粹雪作雲。非是。○第宅。才調集作甲第。○朱門。才調集唐文粹門作輪。○醉暖。才調集暖作飽。○為樂飲。唐文粹作一為樂。汪本校云。一作樂。案誤。○夜半。才調集半作坐。

買花 才調集作牡丹。

○喧喧。唐文粹喧作誼。○酬直。唐文粹直作值。○百朵紅。唐文粹百作十。○幄幕。才調集作帷幄。唐文粹作帳屋。○水洒。唐文粹洒作灑。○移來。才調集移作遷。○習為俗。才謂集習作皆。○迷不悟。才調集悟作誤。非是。

考異終

昭和二年三月十日印刷  
昭和二年三月十五日發行

正價金貳圓八拾錢

禁 漢 譯  
不 許  
複 製

著 者 鈴 木 虎 雄

印 行 者 八 坂 淺 次 郎

印 刷 所 弘 文 堂 印 刷 部

發 行 所  
發 賣 元

東京市丸太町一丁目九番  
東京市丸太町一丁目九番  
東京市丸太町一丁目九番  
東京市丸太町一丁目九番  
東京市丸太町一丁目九番  
東京市丸太町一丁目九番  
東京市丸太町一丁目九番  
東京市丸太町一丁目九番  
東京市丸太町一丁目九番  
東京市丸太町一丁目九番

弘文堂書房  
弘文堂東京店

製本所弘文堂工場

9214  
Su 96

終

